

ジュニヤーナガンジャ
—天空の神智郷と大聖ヴィシュッダーナンダ—

ベンガル語原著 ゴビナート・カヴィラジ
英訳増補 ガウタム・チャテルジー
邦語編訳 玉井辰也

目 次

一. はじめに

二. ジュニャーナガンジャと大聖ヴィシュッダーナンダの生涯

三. ジュニャーナガンジャの神秘

四. 身体と行為、ジュニャーナガンジャの本質

五. ジュニャーナガンジャからの十の書簡

六. 珠玉の聖語——ゴビナート・カヴィラジの日誌より

訳者後記

解説

はじめに

すべての器官はその保護を持つ——眼に対する瞼のように

時(とき)は一九七六年六月一〇日、処(ところ)はヴァラナシ。私が十三歳の時のことだった。ベンガルの家庭にとって、〈ヤジュノパヴィータ・サムスカラ(聖糸式)〉は、正に結婚式のようなものだ。新婦がいないだけである。私の場合、この聖糸式は三日に亘って執り行われた。マ・アンダマイのアシュラムで、私の家族全員と共に、彼女の前に立った。無論、母も臨席した。私の頭は。この慶祝事のために綺麗に剃り上げられていた。マ・アンダマイに低頭敬礼すると、母からその広い部屋に置かれたベッドに横たわる紳士にも敬礼するように促された。その方は、背が高く、高齢で、病気のようだったが、ベッドから起き、私がその足に触れたときに何か言葉をかけられた。サンスクリット語だった。母はその祝福の聖句を復唱するように促し、私は不承不承従った。何故なら、丁度その頃ガーヤトリー聖歌と呼ばれるサンスクリット章句を暗誦しており、かけられた祝福の章句は別の聖句のようだったからである。その当時の私の年齢で、聖歌やマントラのような長大で古典的な

サンスクリット聖句を記憶することは、極めて難しかった。しかし、私は、パンディット・イシュヴァラチャンドラ・ヴィディヤサガルとパンディット・スニティ・クマル・チャントリヤというサンスクリット諸学の伝統を汲む家門に属しており、その運命に従うのみだった。

六月十二日、その方は限りある形骸を捨て、旅立った。その時、初めてその方の名を知った。マハマホパディヤヤ・パンディット・ゴビナート・カヴィラジ師こそ、その方だった。だが、当時は彼がどのような方が知る由もなかった。私は、数学学位を取得後、改めてカヴィラジ師の名に接する機会が増えたが、実は師との相見入門は既に実現していたのである。私の聖糸式の際、聖句を伝えることにより、師は相見を果された。より正確に言えば、師はその聖句によって私の入門を許されたのである。師が唱えたサンスクリット聖句は、「ヨーガヴァーシュタ」の一句であり、《師ノ聖言モ、弟子ノ啓発ヲ俟チテ始メテ自得ニ至ルベシ》、即ち、真の悟りの高みに至るには、師の教えと共に、弟子自身の英知が必要だ、という意味である。この聖句は、弟子自身の啓発を強調している。たとえ靈的師がいなくとも、自身の英知があれば、悟りと解脱に至ることができる。これは、カヴィラジ師から私への大いなる教えであり、私が既に自らの純一の魂の中に無限の可能性として持っている生得の知恵を自身で養成しなければならないことを意味する。無論、その

当時これらすべてを理解したわけではない。だが、それは紛れもなく私自身の聖糸式であり、その糸は悟れる魂の聖なる言葉で編まれていたのである。その図らずも実現した入門式の後、マ・アンダマイがカヴィラジ師と語る間、静かに座っているように言われた。私は今でもその場面をありありと思い浮かべることができる。少女たちが、私たちの間に長い白布を掲げ、ヴェールのように遮った。二人はその薄いヴェールの彼方にあり、師たちは互いに見つめあい、その両眼には涙があった。

一九八〇年、私は卒業と共に、タクル・ジャイデブ・シン師のもとに通い始めた。母が提案してくれたからだ。そして、ジャイデブ師は、ただタントラ、特にカシミール・シヴァ派を、カヴィラジ師から学ぶために、そこに居たのだった。カヴィラジ邸に母が多くの帰依者たちと共に通い、ジャイデブ師がタントラを学びに通ったのも、ひとえにカヴィラジ師という悟れる靈的実在のゆえなのである。一九八〇年～八六年、私はジャイデブ師のもとに通った。師はその頃、アビナヴァグプタの古典『パラトリムシカ・ヴィヴァラナ』とカビールの作品を訳出させていた。私は、ジャイデブ師から文献目録の作り方を教わり、インド古典音楽を始め、カビールやカシミール・シヴァ派に関する興味と研究意欲を搔き立てられた、かつて師は私の母に会い、ベンガル語で書かれたカヴィラジ師の日記を英語に訳したいと洩らされたこともあったそうだ。ジ

ジャイデブ師は一九八六年に逝去され、私は学匠パンディット・ヴラジ・ヴァラブ・ドゥヴィヴェディ師に師事することとなった。この方もサラスヴァティ神殿のカヴィラジ師の席を継がれた方である。

ドゥヴィヴェディ師は、私のサンスクリット学、特にアーガマの師となり、アビナヴァグプタの代表作『タントラロカ』をサンスクリット語から英語に訳出するように励ましてくれた。そして、ドゥヴィヴェディ師のご指導とカヴィラジ師の恩寵のもと、私はその訳業を開始した。英訳『タントラロカ』の第一巻は、ドゥヴィヴェディ師の序文と共に、二〇〇八年に発刊された。原『タントラロカ』全三十七章を七巻に編集したもので、私が翻訳し、ドゥヴィヴェディ師が訳文全体を監闈された。英訳『タントラロカ』は、今日までに五巻が刊行されており、本書の英訳は世界初出である。今では、そのドゥヴィヴェディ師も亡くなつたが、カヴィラジ師、ジャイデブ師、ドゥヴィヴェディ師の見えない聖なる糸は、私にとって永遠の聖なる賛歌となつたのである。

或る日、ドゥヴィヴェディ師から電話があり、「日本人の求道者がヴァナラシに居るのだが、聖ヴィシュッダーナンダ道場への入館を断られたらしい。彼を手助けしてくれないか」という依頼だった。私が同行し、何の問題もなく、入館できた。彼は喜び、当時滞在していたクリシュナマルティ財団の食事に、私を招待してくれた。二〇〇七年八月一九

日のことだった。その折、かつてクリシュナムルティが大聴衆の前で講演したバニヤン巨木の下で、彼から一冊子を手渡された。その本は、ベンガル語で書かれており、書名は『Gyanganj』。そして自分のためにその本を英訳して欲しい、そうすればその英訳を基に日本語に移すことができる、そのために多少の資金も提供したい、ということだった。私は、微笑みながら即座に「お金は結構です。私には、むしろ翻訳を通してカヴィラジ師の聖言に触ることは、大いなる恩寵であり祝福です」と答えた。彼の名前は「高岡光」と言い、後にクリシュナムルティが、既刊の講話録の中で、彼に言及していることに気が付いた。ドゥヴィヴェディ師は、彼の望みを叶えるように励ますと共に、私が資金提供を受けなかったことを殊更喜んでくれた、師は、幾度となく祝福の言葉を述べられた。

だが、師に勧められたにも拘わらず、所定の期限内に翻訳を完了することはできなかった。と言うのも、その時丁度『タントラロカ』の英訳を開始したところだったのである。また、翻訳と並行して、カヴィラジ師の日誌も読み始めていた。結果的には、その精読は大いに裨益し、本書『ジュニヤーナガンジャ』の英訳として結実した。古来幾多のヨーギやシッダ、修行者や求道者達が探し求めてきたこの書の原ベンガル語版は、ジュニヤーナガンジャからの十の書簡の精粹を含め、すべてかかる

聖語から成っている。この英語版にはカヴィラジ師の日誌の一部を翻訳増補した。それは、ジャイデブ師がベンガル語から英語への翻訳を望まれ、初めて実現したものである。以上が、本書誕生の由来である。

ヨーギたちの間では、チベット近郊のヒマラヤ渓谷に〈ジュニヤーナガンジャ〉と呼ばれる秘境が実在することは、古来より深く信じられてきた。そこでは、かつて人身を纏(まと)い、霊的修行を成就し、竟には神智を得て、神人と成り、生前解脱を果した魂たちが今も存在している。例えば、ブッダや大聖ヴィシュッダーナンダのような存在だ。

ブッダは最初の説法(初転法輪)の場として何故ヴァラナシ(サルナート)を選んだか? 当時、野獸の類を避けることのできたのが唯一ヴァラナシの〈鹿野苑〉であり、ヨーギたちはそこに集まり、粗雑な肉体を脱し、精妙な身体となって〈ジュニヤーナガンジャ〉への往来を果した。聖仙たちは、この〈鹿野苑〉では粗雑な肉体も安全であることを知り、再びその肉体を纏い、霊的修行の旅を続けたのである。ブッダがこの地を選んだのは、ひとえにこれが為である。彼は、偉大なるヨーギ、(シャーキヤ)ムニであり、そして竟にはブッダ(仏陀)、タターガタ(如来)となつた。

さて、物理的にも実在する〈ジュニヤーナガンジャ〉に関して、誰がその実在を説示し、そこに至る道筋を示すことができるだろうか。眞の

ヨーギのみが可能であり、パンディット・ゴピナート・カヴィラジ師こそが、その靈的師である大聖ヴィシュッダーナンダの佑助を得て、著述という形でこの難事を達成されたのである。そして、この書物こそが、我々が実際に手にすることのできる唯一の物質的証拠と言える。カヴィラジ師は、この書の中で明言する、「人はこの地(ジュニャーナガンジヤ)を、物理的、精神的或いは靈的といった生のあらゆる位相に於いて認識できる。ヨーギや修行者がこの地を靈的な位相で認識できれば、物理的な位相においても認識し、訪問することができるだろう」と。

さあ、我々も愈々、霧に閉ざされ、秘密の洞窟に満ちた神秘境、内にも外にも存在する〈ジュニャーナガンジヤ〉探求の旅に旅立とうではないか。

ガウタム・チャテルジー

二〇一四年マハ・シヴァラトリの日に

第一章

ジュニヤーナガンジャと大聖ヴィシュッダーナンダの生涯

偉大なる魂の伝記を書くなど不可能だ

これから語ろうとする「マハーピルシャ(偉大なる聖哲)」は、理想の人格を兼ね備え、全き解脱に至ったヨーギだった。この世界では、かかる至純にして敬虔なる生涯、行動、叡智、そして一途な献身、醇乎たる人格は、極めて稀なことだ。そして、かの至高の生涯を描くことにより、我々もその高みに至ることができる。その望みをもって、これからこの難題に立ち向かいたいと思う。無論、私にかの大聖の生涯を描く資格などある筈がない。ただその超絶した生涯の万分の一でも理解できれば、或いはその光輝の一閃でも認識できれば、我々の人生も意義あるものとなるだろう。たとえ我々の精神が、あの方の粗大な身体だけでも把握し得たとしても、それだけでは生涯の素描或いは伝記の類を作成できることは到底思えないである。

ことほどさように、伝記を著述するということは、至難の業なのである。何故か？ 極論すれば、至難ではなく、不可能なのだ。これは誇張ではない。考えても見よ。果して人間が他人の人生を正確に理解し、記述することが可能だろうか。自分の人生さえ成長するにつれ、幻のように見えるものだ。自分の人生さえまともに理解できない人間が、果して他人の人生を理解することなどできようか。ましてや超凡の大聖をや！

無尽の力が、世界の内外に存在し、陰に陽に普段の活動を続けてい る。我々の自己中心的な執着ゆえにその活動を見ることはできないが、生のあらゆる諸相において活動していることは疑う余地がない。ただ我々が理解できないだけなのだ。だが、自我の滅却により、この偉大な力を経験することができた者は、人生の些細な場面においても、その偉大な力の恩寵を感じることができる筈だ。〈マハーシャクティ(偉大な力)〉の活動と遭遇した者は、大いに満たされるのである。

我々の知覚が自我によって覆われている限り、その人は人生の素描が可能だと思い込み、あまつさえそれを達成しようと試みる。だが、やがて万事休すだ。何故か？ 先ず、偉大な存在たちには、人間としての記録、即ち伝記などというものは存在しない。あるとすれば、単に魂のない粗雑な瑣末事の集積であり、ただの文字に過ぎず、生命ではない。

《その為人、剛きは金剛石に勝り、嬌やかなるは花も羞じらう。

世界の誰か、かかる至高の魂を知ることあらんや。》

このバヴブーティの言葉は、文字通り正しい。この卓越した魂は、厳に勝りて剛強、花にも増して優婉だ。彼の中には、相反する天資が同時に共存する。〈神〉が絶対の矛盾の中で憩うことができるよう、〈彼〉もすべての矛盾を超越して無執着だ。その帰依者たちも〈彼〉と同様である。そのような〈彼〉らの人格を記述するという愚を、誰が敢えて冒すだろうか。

人間の堕落とサットグル(正師)

時の流れと共に、善き行いの理想像も消え去り、人間は、人生のあるべき目標を忘却してしまった。恩寵の悟りから転落し、迷妄の中で貴重な光陰と身命を費消してきた。意義あるものの代わりに無意味なものを求め、聖典や過去の聖哲の言葉に囚われ、真の信仰を失った。かつての厳しい修行、あの純粹性、あの叡智への信仰と希求は、もはや失われてしまつた。人間が真理に違背してしまつたからだ。身体は不浄となり、精神は汚染され、心は狭隘に、眼は曇り、知性は死んでしまつた。そのような人間に宗教の奥義を悟ることなどできようか。然り、不信は尽きず、思念は消滅しない。高貴かつ甘美な趣きを有する真理への志向など

起こり得ない。これが未熟な精神の動搖が決して止まない要因なのである。

かの聖なる甘露を味わわんがため、アマルダムの王から微小の虫に至るまで、満たされぬ飢渴の思いを抱きながら、世界の至る処を絶えず放浪している。惨めな生を得ても、夢中の存在はそのつかの間の生に満足する。だが、それを真に得るまでは、決して心底からの満足は得られない。常に不安と苦惱に苛まれ、つかの間の快楽に溺れ、自らを限り、疎外された者に対しても、かの甘露の味を味わせるため、マハーピルシャ(偉大なる覺者)は、全能なる世界の母の息吹と共に、聖なるサッドグル(正師)の姿を取り、あらゆる時代に、この衰頽の地上に顕現しているのである。

無論、私にこの懸案の主題について論じる資格などないことは知っている。人は心身を浄化し、修練しない限り、神々の殿堂に入り、神々を祀る資格は得られない。ゆえに、その精神が浮薄かつ頽廃した人間にとつて、至高の大聖の記憶は限られている。私が自らの菲才を深く認めながらも、この主題の議論に参加しようと思うのには、理由があるのである。

真のヨーギとはヨーガとヴィジュニヤーナ(学智)の奥義に達した人

瞑想(ヨーガ)と学智(ヴィジュニャーナ)の奥義に達した人は、修行者に対し、聖典の精髓と光輝を示し、教え導くことができる。その人は、理想的なヨーギであり、理想的な賢者にして宗教者、偉大なる魂である。聖句の本質的意味と真実を知り、究極の英知を体現し、神の力と愛を伝える偶像でもある。彼は、意志、知識、行為を三頂点とする偉大にして光輝ある三角形の中心点を占める統一の主である。彼にとっては空間も時間も消滅し、無に等しい。即ち、彼は必然的に聖なる正師(サッドグル)、神の顯現となる。その正師の恩寵の下、他ならぬ正師によって示された道と目標を目指し、我々は靈性の道を前進することができる。火が、内に含まれる不浄なものさえ受容し、浄化し、決して捨て去ったり拒絶したりしないように、偉大なる聖者とその眷属たちも、種々方便を以て、人間の墮落した精神をも受容し愛を以て包容する——これが私の信念である。神の慈悲には、精神の貧しきも乏しきも漏れることはない。幼児が母の膝に上ろうと懸命に声と手で求めるとき、清潔も不潔も考えない。母の方も同様だ。躊躇することなく、愛の心を以て子供を抱擁するだろう。この愛に包まれた母の膝の美しい浄化によって子供の垢や汚れは自然と拭われてしまうのである。

ジュニャーナガンジャへの道

さて、かつてヴィンディヤチャルから約十六マイル離れたところに隠者たちの僧庵群があり、多くの聖者や隠者たちが暮らしていた。当時、マザー・シャーマー・パイラヴィーも、その地の洞窟に居住していたのだが、或る日、二人の若い修行者がそこに滞在していき、マザー・パイラヴィーは二人を手厚くもてなした。その後、一人の隠者(マハーピルシャ、偉大なる魂)がやって来て、二人を連れて行った。

夜が明けた早晩、その修行者は自分が言語を絶した神郷に居ることに気がついた。後に、ここがかのウッタラパサの中央部にある高名だが極めて厳しい世に隠れなきヨーガアシュラム(ヨーガと瞑想のための修練場)だと知るに至る。

素晴らしい眺望だ——周囲を連なる峰々の頂きに囲まれ、抜けるような青空と風趣ある雲々、天上の音楽の如きジリ河のせせらぎ。その中央部に、この地の八分の一をも占める巨大な僧院がある。その周囲には、様々な施設、ヨーガたちが戸外で練修できる場やアーチ型の橋が掛けた池もある。中央の僧院は、幾層かに分けられ、各層はその知識や教育のレベルによって定められる。ここにはヨーガと科学に関する素晴らしい教育課程が存在する。全修行者が、入門式を終えた後、ほとんどの時間をこの僧院で禁欲生活の下、教育を受けなければならない。科学の各部門が開設されており、各部門は完全に専門の学匠によって担当される。

例えば、大聖シャマナンダ師であり、この道場全体の総責任者は大聖ギヤーナナンダ師である。

この地は極めて古く、言い伝えによれば、古名はインドラバワンだつたと伝えられている。五、六世紀頃に、ギヤーナナンダ聖師が、廃墟だったこの地を再興し、その運営と保存の任に当たった。そして現在に至るまで、同師が総責任者である。多くの修行者がそこに滞在しており、以下のような類別がある。

一、純潔の若い男子修行者。

二、純潔の若い女子修行者。

三、諸科学の学習者。上記二種とかなり重なる。

四、聖仙たち。ここに居住する聖仙たちは少なくない。その年齢層は、驚くなけれ、何と優に二、三百歳は超えており、中には千歳以上の聖仙も存在する。これらの大聖ヨーギたち(シッダ・マハーピルシャ)の中、多くの聖仙は所謂「食物」は摂らない。未だ究極に至らない聖仙たちは一種の「もの」だけを摂る。

ボラナート、マハタパ大師に相見(しょうけん)す

ボラナート(大聖ヴィシュッダーナンダの俗名)が〈ジュニヤーナガンジヤ〉に八～十日間滞在した時、ニマーナンダ大師が、かの大聖師マハタパのもとへ連れて行き、紹介してくれた。その折、聞いた話では。マハタパ大師の年齢はおよそ千二百歳だということだ。マハタパ大師は、最も力のある偉大なヨーギである。普段は、その僧院には住まず、また特定のアシュラムも持たない。チベットの某所にある洞窟に住み、その中には、ラジャラジエシュワリ女神の石像が置かれている。それゆえ、そこはラジャラジエシュワリ精舎と呼ばれる。そこには住居もなければ、家屋もない、実際何もない。必要ではないからだ。マハタパ大師は多くの時をここで過ごされ、時たま僧院に下りて来られる。また時には、グルマー(師母)のケペ・マー詣でをされる。この氷に閉ざされた地域には、こういったヨーガアシュラムのような精舎が点在するが、すべてラジャラジエシュワリ精舎の傘下にある。この大聖仙は、普段は話すこともなく、自らの定中に留まり、外界との接触はない。師の高弟ブフリグラム大聖が、これらの精舎を統括運営している。大聖ブリグラム師こそ第一人者であり、監督者、実践者、創設者なのである。ニマーナンダ師、シャマナンダ師、ギャーナナンダ師はすべてこの大聖ブリグラム師の兄弟弟子である。無論、ヨーガの実修において、ブリグラム師が第一人者であることは言うまでもない。

マハタパ大聖師は、ボラナートを弟子として受け入れる入門式(ディクシャ)の際、シヴァの一触により、力と共に 〈種言(ビージャマントラ)〉 を授けた。入門式が終わると、修行者は教育のためヨーガアシュラムに適時留まらなければならない。その教育課程は圧巻の一言に尽きる。ボラナートは、シャマナンダ師から 〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ(太陽学)〉 を教わり、ブリグラム大師がヨーガ全般の教えを受けた。この教授は、常恒に続く——とこしなえに。永年に亘る禁欲、弛まぬ修行、無限の苦修練行の末、ボラナートはヨーガと学智の両面において、金甌無欠の知に達したのである。

ヨーガと科学は車の両輪の如し

この科学という語から、西洋のいわば「死んだ科学(ジャーダ・ヴィジュニヤーナ)」と混同しないように。文字通りの意味は 〈特別な智慧〉 である。太陽がその中心を占め、主対象とされるため、 〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ(太陽学)〉 と呼ばれる。聖典の中には、ある 〈もの〉 の実修により、あらゆる領域の全知を自得できる、とある。この 〈シュルティ(聞修による天啓)〉 の修行により、 〈プラフマ・ヴィジュニヤーナ(神智)〉 に至ることができる。この科学の本質は何か、またいかにしてその科学を制御できるのか、特にそこに到達した者だけが、太

陽こそがすべての科学の根幹だと知っている。世界の創造・保持・破壊という一連の流れが、現象的にも実質的にも、すべてが太陽の支配下にあるのだ。意志力、知力、行動力の拡大といった事も、全て太陽によつてのみ可能となる。のみならず、太陽こそデヴィアンの道の究極目標なのである。ゆえに太陽を「解脱の門(ムクティドワル)」と称しても誇張とは言えない。究極の自己知、即ち本性の完成に達するためには、「太陽本質(サウル・タットヴァ)」への参入が絶対的に重要である。ゆえに、ヨーガの究極目標は、科学の究極目標に他ならない。注意深く観察すれば、科学も広義のヨーガの一種であり、ヨーガと呼ばれるものも本質は科学と異なることが分かる。単なる階梯の差異に過ぎないのである。従って、修行者にとって、ヨーガと科学は同等に重要である。ヨーガの道における科学、科学の道におけるヨーガは、両輪の如く決定的に必要なのである。

〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ(太陽学)〉 こそ諸学の王

〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ(太陽学)〉 を精確に理解できれば、他の分野の科学も容易に獲得できる。『ヨーガ・シャーストラ』の中に、「二つの究極果実(シッディ)——サルヴァジュニャートリトヴァとサルヴァブハヴァドヒスタトリヴァは、確かにシッディの領域における高次

の達成だが、科学の王国における 〈サウラ・ヴィジュニャーナ(太陽の科学)〉 の重要性は、それに等しい。」とある。例えば、〈チャンドラ・ヴィジュニャーナ(月の科学)〉、〈ナクシャトラ・ヴィジュニャーナ(星々の科学)〉、〈ヴァーユ・ヴィジュニャーナ(虚空の科学)〉、〈スワラ・ヴィジュニャーナ(音階の科学)〉、〈デヴ・ヴィジュニャーナ(神々の科学)〉 等が、〈サウラ・ヴィジュニャーナ(太陽の科学)〉 に属する各専門領域である。

真理は聖典の言葉だけでは得られない

ボラナートは特別に超凡の才能に恵まれていたので、ヨーガと科学の両面において同等の高みに達することができた。双峰の頂上に達するという極めて独自で稀有な例と言える。通常、真理の教えというものは、いにしえの聖哲が悟り、師の導きと修行者自身の努力によって再検証されるものである。かくして、彼も世界そのもの、即ち世界の主となり、永遠の偉大な力を獲得したのである。自らの意志により、自然の連鎖力(シャクティマーラー)を自由に扱う力を獲得し、究極と自身の間を隔てるヴェールを取り去ったのである。聖典の言葉を聞くだけでは、真の宗教的生に至ることはできない。アーリヤであろうが、聖典の言葉だけでは真の知に達することは決してないのである。言葉によるだけでは、物

事の直覚的知は得られず、ヴェールは言葉の錯誤によっては解消されない。魂の内なる王国で得た至高の真理は、師の示教と自身の苦修、信仰、練行、自学を伴う厳格な修行によって至ったものだが、彼が達した科学の完璧かつ不動の境地は、単なる聖典の学習だけで得られたものではなかったのである。

ボラナートは、十二年間に亘り、禁欲と厳しい苦行生活を過ごした。そして世上に居ながら、全世界を無心かつ自然に支配する途方もない力に触れた。月、太陽、星々、虚空、水といった諸物は、定められた摂理に従い、自らの活動を黙々と為し、一瞬たりともその義務から逸脱することはない。情愛に満ちた配慮の下、その活動は嬰児の誕生以前から、母乳の流動を促す。世界の母の恩寵であるこの偉大な力に依る限り、ジーヴァ(個人の魂)は、その生涯において何ら心配することはない。歓喜と苦痛、成功と失敗、内と外、睡眠と覚醒といったいかなる状態にあっても、慈愛の母の顕現ならざるはない。その時、哀れなエゴは、太陽の前の星屑のように消え去り、影さえ留めない。修行者(サーダク)は、禁欲生活を制御し、エゴを抑制することにより、大自然に任せる境地に到達することができる。そこに至ったヨーギは、何ら恐れも動搖も感じない——〈神〉ご自身が、その吉凶すべてを自ら為し給うからである。

ヨーガの顕現

〈ヨーガの顕現(ヨーガヴィブーティ)〉に関しては、様々な人の様々な発言がある。ここでは、そのごく一部を論じたい。ヨーガの自然な成就には、自己知の達成が必須である。神人シャンカラチャリヤは、かの『ダクシナームールティ』の中で、至高の状態として〈サルヴァトマブハヴ(魂が一に帰した状態)〉を描いている。この語に関して、スレシュヴァラチャリヤは、「人が動く時、その影も常に従うように、〈アートマ〉或いは〈神〉の本質に至れば、神性の光輝は自ずから顕現する」と注釈している。即ち、〈アイシュワリヤ(光輝)〉と〈アートマ〉は別物ではないのである。禁欲状態にある時、ビンドウ(体液)は浄化され、静謐になる。これが心身にとって重要なのだ。心身が浄化され、静謐になれば、即ち実修の力により、心身が浄化されれば、殊更力を用いることなく、自然にあらゆる莊厳と光輝が顕現するのである。

ボラナートは、ヨーギに求められる途方もなく稀有で困難な行為を通して、この境地に至ることができた。多くのヨーギが、様々な成果をもたらす厳しい修行に長期間励みながら、この境地に至ることはない。このことから、ヨーガの修行の道において、いかに正しい修行が重要かが分かる。正しい修行こそがヨーガの最終閨門だと言えるかもしれない。

〈キラト・ドーティ〉と〈キラト・クンタク〉

例えば、〈キラト・ドーティ〉は、〈ナービ・ドーティ〉の進化形に過ぎない。二十五～三十尺の長いビロード片か清潔な纖維を用い、臍から口にかけてドーティの伸縮活動を連続して行う。このドーティ(浄化)行が不十分であれば、アーカシャ・ガマン(空中浮遊)は不可能だ。長い修練の末に可能は可能だが、同時に自らの外的感覚を失う恐れもある。その時には、空中を飛行中に逆行する凄まじい空圧に衝突してしまう恐れが生じる。十分なドーティが為されれば、身体は空虚となり、全身体を収縮したり伸長したりする能力が向上する。そうなれば、驚くべきことが可能になる。例えば、人体の小さな毛穴から中に入ることもできる。即ち、自らの意志に従い、身体のどの部分でも自由に伸縮することが可能となるのである。

この〈キラト・ドーティ〉により、身体を浄化し、身内を虚空で満たすことは、〈キラト・クンタク〉と呼ばれる。このクンタクの効験により、真空中で話すことも、話しながら空中に浮上することも、何ら支障がなくなる。外的感覚を保ちながら、外界とは確然と分離しているのである。通常、この状態は鼻等で呼吸している間は生じない。〈パラカーヤー・ブラヴェシャ(他の身体に入る能力)〉の際にも、〈キラト・クンタク〉は通常のクンタクよりも遥かに効果的だ。〈キラト・クンタク〉

行により、身体が清浄な虚空に満たされれば、その心身はいかなるものにも干渉されず、その知はいかなる影響も受けることはないのである。

カヴィラジ、大聖ヴィシュッダーナンダに相見す

私(カヴィラジ)が初めてババジ(大聖ヴィシュッダーナンダ)の聖なる足下に参じたのは一九一七年十二月のことだった。今となっては遙か昔の出来事のようだが、この特別な日は、格別の法悦と共に私の記憶に深く刻まれている。私の記憶では、それは夕方で、恐らく午後四時頃だった。私は、プラフマチャリの少年と共に、ハヌマン・ガート(ディリブガンジ、ヴィシュッダーナンダ・クティール)近くにあった二階建ての僧庵を訪ねた——かの大覚者に会うために。建物内は人々で溢れかえつており、少し離れたところに、かの偉大な方が虎の皮を敷いた床台の上に座っておられた。その甘美で慈愛に満ちた人柄と微笑み、涼やかな双眸、秀でた額、オーチャー色の僧服、その方を一瞥するや、正に知恵と慈悲の化身がこの三界のあらゆる存在を死の恐怖から救済せんがため到來したのだと感じた。その方の相貌を見て、私は、偉大なヨーギであり、稀代の大聖哲と評されたマハマヘシュブアル・アビナヴァグプタを弟子が描いた平安かつ敬虔な姿を想起した。私は、室内に入ると父なる師の御足の下に跪探し、床台に向かって左側に坐した。父なる師は、私

の姓名と住所、そして「何をしており、何をしたいのか」と尋ねられた。私は答えた、未だ初心者に過ぎません。あらゆることを見ることから始めるつもりです、と。

大聖ヴィシュッダーナンダが行った奇跡

その折、師は〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ(太陽智)〉によるいくつかの奇跡を見せてくださった。当時、私は〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ〉の何たるかは知らなかった。知らないどころか、聞いたことすらなかったのである。しかし、実際に見聞し、これにより、世界の創造、保持、破壊、すべてのことが可能であることが理解できた。師はチベットの中央高原にある秘密のヨーガ修練場・ジュニャーナガンジャに長く滞在され、ヨーガの修練に精進されたが、ヨーガと共に様々な科学も学ばれた。そして諸科学の中でも〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ(太陽学)〉が究極の学なのである。実際に見聞したことだが、師は、信者の求めに応じて人の手やハンカチ、シーツの端等に単に右手の指で触れるだけで、様々な香りを室中に満たさせていた。その香りは、芳しいのみならず、長く保持され、衣服を洗ったぐらいでは消えない程だ。師は、誰がどんな香りを求めようと、あたかもサンダルや薔薇、鶏やケシの実、木蓮やみかんを出すように、いとも易々と様々な香りを出しておられた。

また師は、ヨーガや靈的主題についても語られ、質問には懇切に答えられた。ただ、「ジュニヤーナガンジャ」に関する興味本位の質問には、答えられなかった。

大聖ヴィシュッダーナンダこそわが正師

師を度々訪ね、多くのことを見て、様々な言葉を聞くにつけ、私はこのプラフマチャリジ(聖師)に対する尊崇の念は高まる一方だった。それまで、真実をかくも力強く語る方には出会ったことがなかったのである。その最初の相見より、わが心は、師の偉大な御足の下に額づいていた。わが探し求めていた方に竟に出会えたのだ。詩人は語る、《心は世々を経て唯一の同行者なり》。前世に得た印象はすべて心の中に留まり、特に大きな転機と共に記憶に転じる。そして前世の経験を基にした記憶は、その心の浄化度に応じて、明瞭に或いは曖昧に現れるのである。ババジ(師父)のもとに至った時、私は悟った、「この方は常に私と共に居てくださったのだ、そして今、その永き親密な関係が、眼の塵を払うことによって顕現したのだ」と。師もまた初めて会った時から、私を極めて親密な者として深い愛を以て接して下さったのである。

物質の変容

私は師父に訊ねた、「ババ(父)よ、ヨーガの經典にこうあります、
《プラクリティ(根本原質)或いは特定の事物により、ある物質は他の物
質に変容する》と。そのようなことが可能なのでしょうか?」

師父は答えられた、「可能だ。世界のすべての物質は、各々特有の組
成を持っている。例えば、この薔薇だが、この中には世界に存在するあ
らゆる物質が含まれている。ただ薔薇を現成させる組成が他の組成に勝
るため、薔薇として現れている。他の組成は隠れているに過ぎないの
だ。だが、真のヨーギや神智者ならば、すべてを見ることができる。そ
の能力を用いて、望みのままに、ある物質の組成を他の組成に変えるこ
ともできるのだ。かつては隠れていたものが現れ、以前には現れていた
ものが次第に姿を消す。この過程を経て、世界のあらゆるもののが変容す
るのだ。神天界(デヴ・バーヴア)から動物界(パシュ・バーヴア)へ、動
物界から神天界へ、相互に可能なのだ」。そう語られながら、師父は先
ほどどの薔薇の花をジャバの花に変えられた。ヨーガ經典に言う〈ジャー
ティヤーンタル・パリナーム(転生、異種への変容)〉を科学的に実証し
てみせられたのである。

以降、私は同じ時刻に定期的に師父のもとを訪ねることになった。夕
刻に近づくと、私の心は世間の喧騒からすっかり離れ、ひたすら師父に
お会いする望みで一杯だった。師父は、時にハヌマン・ガートからアス

イ合流点までガンジス河畔を歩かれたり、時にはパンチャガンガ・ガートからアスイ或いはナガワ・ガートまでガンジス河を小舟で渡り、アディ・ケシャヴ・ガートまで上られることもあった。クルクシェトラとドウルガー・バリを経由してサンカトモチャンへ向かって歩き、多くの人が師に従っていたことも記憶に鮮やかだ。師父は黄昏と共に帰宅されるのを常とし、日没後は決して外出されなかった。

ブラクリティ(根本原質)とプルシャ(至高意識)の結合

ヒンズー暦一三二四年のことだが、ディリップガンジの師父邸で議論の際、サーンキヤ哲学のブラクリティ(原質)とプルシャ(神我)の原理に関する疑問が湧いてきた。そこで、〈スリシュティ・タットヴァ(創造原理)〉を講義中の師に訊ねた。丁度、ブラクリティとプルシャの結合に関する内容だった。師父は答えられた、「この二者の衝突なくして、いかなる活動、結果、出来事、行為もあり得ない。この世界で認識できるすべての存在が、この二者の衝突の結果であり、今現に起こっていることもそうだ。たとえ、プルシャとブラクリティの本質を認識できなくとも、この摂理は厳然と存在する。すべての存在の中にプルシャとブラクリティが含まれており、原子や分子の中にさえ存在する。すべての創造物には、

この相反する二つの力の衝突があり、この摂理はすべてに存在するのだ」と。

師父の傍らに薔薇の花があった。私は質問した、「師父よ、この薔薇は男性ですか、女性ですか？ またブラクリティとプルシャ、どちらの割合が多いのでしょうか？」。

師はその薔薇の花を取り、一瞥後、「この花は女性だ。」と答えられ、その根拠を種々示された。次いで、「男性の薔薇の花を持って来なさい。面白いものを見せてあげよう」と言わされた。そこに他の花はなく、また夕刻の散策の時間も迫っていたので、「ここには他の薔薇の花はありません。命じて頂ければ、外から持ってきます」と答えると、「その必要はない。この薔薇から花びらをすべて摘み、私に渡しなさい」と仰った。その通りにすると、師父は花びらのない薔薇を掌の中で一、二回上下に振られ、「太陽光線の下で、花はその力により開花する。今この薔薇の蕾を微かな蔽いか手掌の中で、外気が直接触れないように、数分保ちなさい。創造の大いなる御業により、豊かで馥郁たる薔薇を見ることができる」と語られた。私は、言われた通りに両手の掌の中で約五分程花弁のない薔薇を保ち、静かに開けてみた。そこには、何と大きな薔薇の花が、当初の二倍はあり、色彩においても、芳香においても全く異次元の豊かな薔薇の花が誕生していたのである。

師父は、「このように、自然の摂理に基づき、ブラクリティとプルシヤの結合による創造の業が至る処で起こっているのだ。眞の科学の知者は、ブラクリティを深く知り、そこに参入することにより、高くは天から低くは地に至るまで、ブラクリティと同様の創造の業が可能となるのだ」と語られた。

〈ディークシャ(靈的入門)〉

当時、まだ私は〈ディークシャ(靈的入門)〉を終えていなかった。当日の夕刻、私は師父の傍らに坐し、宗教儀式(アニク)に臨もうとしていた。師父の經典講義が進行していたが、突然「お前は心臓に問題があつただろう。今も弱いようだが」と訊ねられた。私は困惑しながら「はい、六年前に病気になり、その後一年余り床に就き、その後も病と戦つてきました。ここ最近は少し良くなりました」と答えた。師父は「ディークシャを受ければ、大丈夫だ。何の心配もいらない」と告げると共に、併せて食習慣の指針を与えられた。私は師父の老婆心溢れる慈悲に感激した。

ある夕刻、師父が〈ディークシャ〉について暗示的に訊ねられた時、突如私の心はあの感情に満たされた。「その時が来た」と感じたのである。その時も師父はあからさまに問われることはなかったが、私が少し

でも望めば、師はその恩寵を惜しむことなくお与えになることを確信していた。そのことが分かっていながら、特別に請うことはなかった。かくして日々は過ぎた。その間、私は師父の講話を拝聴し、様々な神聖な出来事に触れ、次第にそれらに魅了されていったのである。

バルガヴ・シヴラムキンカル・ヨーガトラヤナンダ師

私は、多くの賢哲や聖者と交遊を深め、靈交溢れる豊かな日々を送った。当時、右も左も分からぬ初心者に過ぎなかつたが、約七年にも亘り、偉大なる聖賢たちの靈的恩寵と愛を受けたのである。中でも、或る方を自己知の理想像として心の中で尊崇の念を捧げてきた。その方ほど、靈的修行と東西古今の学識に優れ、聖典を自家薬籠中のものとし、寛厳調和のとれた方を知らない。その方の名はバルガヴ・シヴラムキンカル・ヨーガトラヤナンダと申し上げる。彼は、〈パラー・アパラー〉及び東西の諸学を等しく高度に修得された。当初はシャシブシャン・サンヤルと申し上げるその方の中に、私は初めて人間の不滅の理想像を見出したのだった。彼と親しく接するにつれ、彼の人間性が私の人生に深く浸透してきたのである。

かの偉大なる聖者であるラムダヤル・マジュムダルも、この方と触れることにより、靈的修行において驚くべき達成を見たのである。私自

身、マジュムダル師とは既に一九〇六年頃からの知り合いであり、彼によつて創刊された『ウトサヴ・パトリカ』は、その創刊号から私の宗教的友だつた。彼も、理解はできないが察知することはできる高次のグルとして、偉大なる神人(マハープルシャ)が存在することを信じていた。

私は、バルガヴ・シヴラムキンカル師の著作『アーリヤシャーストラ・プラディップ』や『マナブタットヴァ』等を既に読んでいたが、その超凡の学識さえも、著者自身の人格の前では、太陽の前の蝋燭の炎の如しと感じていた。私は、聖俗両界においてバルガヴ・シヴラムキンカル師に多くを負つており、師こそ宗教生活における伝道師の如き存在と景仰している。

しかし、不思議なことに、それ程シヴラムキンカル師と親密だったのにも拘わらず、同師に靈的入門を請うことはなかった。時が満ち、相応しい徳を得れば、特別に願うことなくそれは実現すると確信していたのである。

真のヨーギとは神なり

或る日の夕刻、ハリシュチャンドラ・ガート付近を歩いている時、心中にある疑問が湧き起こり、師父に訊ねた。「ヨーギの特徴とは何です

か？ いかに正しくヨーガを成就したと分かるのですか？ また第三者はいかにして真のヨーギを見分けられるのですか？」

師父は、微笑みながら答えられた。「息子よ、言うべきことは多い。お前もいざれ分かるだろう。では、簡潔に言おう。苟も完成されたヨーギは全知全能だということを知らなければならない。不可能を可能にするのがヨーギだ。ヨーギの前に不可能事はない」。

「それは神ではありませんか！ 全知全能とは神の属性であり、人間業ではありません。不可能を可能にするのは、マーヤーの力であり、マーヤーは神の御業です」。

師父曰く、「実は真のヨーギとはそういうものだ。神性或いは神の恩寵がなければ、真のヨーギ性には到達できない。即ち、神とはヨーギであり、ヨーギとは神なのだ」。

私は、この言葉は正しいと感じ取った。「天然の魂(アートマ)は無知のヴェールに蔽われており、心中には絶えず欲望や渴望が渦巻いている。刺激があれば、欲望が生じる。そして刺激は幻想だ。無知が去れば、幻想たる刺激も消滅する。残るのは永遠の真実のみ。ヨーガの力により、知の光が顯れれば、無知は自ずから消滅し、絶えざる神の顯現のみが実現する」。

ジャーティヤーンタル・パリナーム(異種への変容・転生)の秘密

或る日、我々はパタンジャリの哲学とそれに対するヴィヤーサの注釈について論じていた。私が「ヨーガに関して、サンスクリット文献中で何故『ヨーガ・スートラ』だけが正しい深層心理的記述があるのでしょうか?」と発言すると、師父は「息子よ、文献の正否を論じることは無意味だ。真の知は言葉からは生まれない。心中のサンスカラ(行)に於いて非理があれば、知は生じない。そしてチッタ(心)の解脱は、サッドグル(正師)の指示と方法に基づく行動を果した時に初めて可能となる。不純な心のままでは真の知は実現しない。単なる知識に意味はない。」と答えられた。

そこで、私は〈ジャーティヤーンタル・パリナーム(異種への変容・転生)〉の問題を提起した。「ご存じの通り、現代の科学界では〈ジャーティヤーンタル・パリナーム〉とその真因に関して、種々の解釈があります。自然の摂理により、生類の世界、植物の世界、或いは鉱物の世界に於いても、〈ジャーティヤーンタル(変容)〉が起こります。いつ、いかにしてこの変容が起こるのか? 無論、科学者たちは色々論じていますが、この変容の謎を解き明かす説明には至っていません。真因は深い謎に蔽われているのです。しかしパタンジャリの教え(『ヨーガ・ス

ートラ』)及びヴィヤーサの注釈には、〈ジャーティヤーンタル〉の謎が説明されています」。

師父曰く、「お前の言うことは正しい。だが、それに何の意味があろうか? パタンジャリの著作を読んで、ヨーギになれるとでも言うのか? 〈ジャーティヤーンタル・パリナーム〉の古典的解釈を聞いて、〈パリナーマカルマ〉を会得できるのか? 大自然の神秘全てを把握できるのか? できる訳がない。では、パタンジャリの〈ジャーティヤーンタル〉解釈を述べてみなさい」。

私は答えた、「ある種から異種への変容が〈ジャーティヤーンタル・パリナーム〉です。この種の変容は、原質或いは基底が満たされた時に可能です。サーンキャ哲学によれば、ブラクリティ(原質)は内在的に結果を含み、外因にはよらない。内在的原質が世界の活動すべての根源的要因であり、それによってのみ〈ニミッタ・ベーダ・ニバンダム〉の様々な活動も生まれます。だが、原質の活動すべてが実際に起こるとは必ずしも限らない。というのも、結果に至る途上の制限者(ブラティバンダク)を通過しない限り、結実には至らないからです。ある媒体(ニミッタ)の扶助を得て、その制限者やヴェールを除去した時、原質の活動のまにまに相応しい結実が達成される。その結果、最低のものが最高のものに変わり、逆に最高のものが最低のものになることも可能になるの

です。古典の中にも、ナンディがインドラ神に至るや、ナフシュはインドラ神の姿から蛇の姿(サルパ・ヨニ)に変じた、とあります。自然の活動の結果、すべてが可能です。この〈ジャーティヤーンタル・パリナームブアード(転生論)〉が、〈カルマ・ヴィジュニヤーナ(行動の科学)〉の基本的原則であり、真実なのです。西洋の科学には、かかる壮大な真理の体系は見られません」。

師父は答えられた、「その通りだろう。だが、そもそもパタンジャリの所説を読んで、〈ジャーティヤーンタル〉の真理を会得できるのかね？ ヨーガの実修なくして、『ヨーガ・シャーストラ』の神秘を正しく理解することなどあり得ない」と。そして、私に花を持ってくるよう言われた。近くにあった薔薇の花を差し出すと、受けとられ、「この花は薔薇の花で間違いないかね？」とお聞きになった。「まさしく薔薇以外の何物でもありません」と私。

師父は、「お前は、この中に薔薇だけを見る。だが、私はこの中にすべてを見る。全宇宙の存在で、この中に含まれないものはない。全存在がこの中にあるのだ。」と仰りながら、右手の指で花を潰し始めた。数秒後に私が見たものは、あの薔薇の花が全く別種の花ジャバに変容した姿だった。そして、みるみるうちに美しいジャバの花に育っていったのだった。

〈スヴァアバーヴァ(自然摂理)〉の働き

かくして、師父は、様々な方法で幾度も幾度もかかる奇蹟を現じることにより、聖句の真髓をお示しになったのである。ある時などは、満開の花を蕾に戻すという 〈プラティロム・パリナーム(遡及変容)〉を示された。「蕾の中に花が潜んでいるように、花の中にも蕾が潜んでいる。種子の中に樹木が存在するように、樹木の中には種子が存在する。相応しい時間と原因が与えられれば、蕾は花開き、種子は樹木に成長する。

〈スヴァアバーヴァ(自然摂理)〉は、至る処に働いている。成長には空間と条件の調和が必要だ。そして花に集中することにより、これらの外的要因を取り除く、或いは蕾の存在を強めることができたならば、花の中に同族要素として既に内在している存在が、次第にその本然の姿を現すのだ。このことは全てに通じる」。

私が「では、個人の魂(ジープア)の要素が〈神〉の中に存在するよう、〈神〉の一片もまた個人の魂の中に存在すると考えてもよいのでは?」と訊ねると、師父は「その通りだ。もしそうでなければ、個人の魂が修行して〈神〉に至ることなどできようか? 抑もその本質がそのものの中になければ、そこから〈それ〉が生まれることなどあり得ないのだ。」と答えられた。

〈ディークシャ(靈的入門)〉 を受ける

一九一八年の前半、私は 〈ディークシャ(靈的入門)〉 を受けた。それ以降、私は師父である大聖ヴィッシュダーナンダの超自然的力を内的にも外的にも受けたこととなった。しかし、これは 〈サーダン・ラージャ(神靈の王国)〉 の秘儀に属することなので、ここで述べる訳にはいかない。公開することは許されないのである。

〈アヌロム(順)〉 と 〈ヴィロム(逆)〉 の 〈パリナーム(変容)〉

或る日、 〈アヌロム(順)〉 と 〈ヴィロム(逆)〉 の両 〈パリナーム(変容)〉 の話題となった。師父は、「双方向の変容が真実だ。カード(凝乳)はミルク(生乳)から、クリームはカードから、そしてギーはクリームから変化したものだ。ミルクの成分はギーの中に隠れた形で存在している。プラクリタダルミ(天成の宗教者)ならば、望めば、ヴィロム(逆行)法則に基づき、内在成分に力を与え、ギーを再びミルクに戻すこともできる。更には、(牛の食べた)草の葉にまで戻すことさえ可能だ。同様に、子供の中に老人の状態が存在する。見る人が見れば、子供を見るだけで、その子の将来の姿まで分かってしまう。同じく、老人の中にも子供が存在する。現在の老人を見ることで、その人の過去を知ることが

できるのだ。ゆえに、自然の摂理により、〈パリナームカルマ(転生)〉の真理に到達すれば、過去智も未来智も自ずから開けてくる。」と仰りながら、わずか数分の間に、咲き誇る花を蕾の状態に戻し、またその蕾を別の花の開花した状態へと変えられたのだった。

シュリ・クリシュナの身体の香り

或る夕刻、私はプリダムの修道場に滞在していた。アニク(勤行)を終えたババジ(師父)は、ベランダで休息しておられ、二人の弟子が団扇で師を扇いでいた。突然、私の脳裡に、シュリ・クリシュナの芳香(ムリグマッド・ニロトパル等)に関する『チャイタニヤチャリタームリト』の記述が蘇ってきた。そこで師父に尋ねた、「師父よ、シュリ・クリシュナの身体の芳香は、『チャイタニヤチャリタームリト』や『ゴヴィンダリーラームリト』に描かれているように、素晴らしいかったですか?」。師は答えられた、「どのような物質の組み合わせによって、その香りが生まれると書いてあるのか? 一つずつ挙げてみなさい」。そこで、私は『ゴヴィンダリーラームリト』に従って、ニーラバンドマ、カストウーリといった物質名を挙げていった。師父は、私の挙げる物質名を聞きながら、両手を動かしておられた。すべて挙げ終わると、師父は私の前に、閉じた手掌を出され、「シュリ・クリシュナの身体の芳香

を受け取るがよい。君が挙げたすべての物質を集め、一つに調合したも のだ。どう感じるかね？」と告げられた。その瞬間感じたのは、この世 に比類なき得も言われぬ香りだということだった。

翌日、師父は、この特別な香りを、太陽光の力を得て新しく造り直 し、ガラスの小瓶に入れて、私にくださった。「師父よ、様々な物質名 を聞くだけで、どのようにしてそれらすべてを集め直し、その上結合さ せることができるのでですか？」との私の問い合わせに、師父は、「何の問題が あろうか。凝集力と物質に関する知識があれば、何の造作もない。太陽 光の助けを得て、遙か彼方の領域から物質を引き出すこともできる。巨 大なものを途方もない距離の彼方から瞬時に移動させることもできるの だ。何の不思議もない。この世界全体が〈神〉の巧みな経緯に基づいて 活動しているのだから。世人には及びもつかないだろう。お前が不思議 に思うのも当然だ。だが、分かつてみれば、この宇宙 자체を創造するこ とさえ不可能ではないのだよ」と、答えられた。

すべては科学の光の下に

実際、何物も破壊されない。たとえ一冊の本を焼却して灰にしたとし ても、いつかどこかで、その本が再び誕生し、単なる眼の錯覚ではな く、正にかの本そのものだということを目の当たりにすれば、何物も決

して無くなりはしないという事実を、我々は受け容れざるを得ない。ガンジス河畔にこぼしたミルクが、長い時を経て異なる河畔で採取されたミルクと同一のものと証明されれば、何物も決してその本質において無くならないことを知るだろう。このゆえに、眞の智者ならば、ある魂が他の世界で、たとえ神靈界であろうが、その同一魂を再生させることが可能なのである。様々な心の様態、セックスの衝撃、発熱のような病気、春夏秋冬といった季節、愛や献身といった感情、これらすべてを科学の光の下で見つめ直すべきなのである。

〈スーリヤ・ヴィジュニャーナ(太陽学)〉を修得すれば、他の〈チャンドラ・ヴィジュニャーナ(月の科学)〉等の諸科学も、掌を指すように明らかだ。創造は、左右の手にある二つの反する〈タディト〉の力の衝突、〈ナク〉と〈ジョティ〉の効果によって為される。創造の流れは、可視光(ジョティ)と共に、空気の振動、星の光、或いは波長によって形成される。〈サウラ・ヴィジュニャーナ(太陽の科学)〉を学べば、個々の専門領域を学ぶ必要はないのだ。

眞の〈グル〉とは

或る日、ババジ(師父)は仰った、「息子よ、眞の〈グル〉の意味を誰も知らないのだ。〈ヨーギ〉の資格なくして〈グル〉の尊称はあり得な

い。〈グル〉は、その両手に、弟子の聖俗両界の福利すべての責任を有する。その途轍もない存在の力により、〈ヨーギ・グル〉は時処を選ばず、完全な状態で現れる。信者たちの内なる叫びに応え、現れるのである。私は常にお前たち一人一人の傍らに居る。心境が進めば、そのすべてを観ることができるだろう」と。

チャクラの秘密

一九二八年の六月、私は、カルカッタのループナラヤン・ナンダン通りの師父宅を訪ねた。或る日(恐らく七日)の朝、散策後に〈ヨガタットヴァ(ヨガの本質)〉に関する議論となつた。

師父は仰った、「〈サッヂチャクラ(身体の六つの中枢)〉については、私の『プラクリティタットヴァ』にも述べているが、不十分だ。総じて、世に出ている論はすべて間違いだ。言葉で説明するには、あまりに複雑過ぎるのだ。ただ、蓮華の花弁については、多少説明できる。花弁の数は、四、六、十、十二、十六、二十だ。クンダリニーが目覚めるや否や、鮮やかな光が顯れる。〈ナービクンダ(臍下叢)〉から最下叢にかけて、クンダリニーは眠っているのだが、その光彩の中で、四つのレベルが容易に見て取れる。その三つの神経〈イダー〉は三つの文字で表され、四つ目は〈サマシュティ・ヴァルナ〉にある。修行の力により、

これら四つが顯れる。〈イダー〉と〈ピンガラ〉は上昇する脈絡、〈スシムナー〉はこの両者の調和から生まれる。より高い段階では〈ヴァルナ(文字)〉が見てとれ、通常六つの文字が花開く。全チャクラの八十四文字が一つになれば、その精髓は纏まって上昇する。それが〈ジュニヤーナ・チャクラ(知恵の眼)〉だ。更に上昇することにより、ヴェールは取り除かれる。また上からは、まばゆい炎が降りてくる。この二つの炎が〈アージュニヤーナ・チャクラ〉で合流する。それゆえ、このチャクラは、二つの花弁を持つのだ。〈サハスラール〉の眩い炎は絶えず降っているが、個人の迂闊な魂はそれを知らない。〈アージュニヤーナ・チャクラ〉が目覚めれば、すべて分かる。これが〈アージュニヤーナ・チャクラ〉の秘密なのだ。

すべてのチャクラの力の核心は知なのだが、修行しなければ、その知は開けない。至れば、すべての文字は一つになり、分離は消える、即ち、多様性の中に統一性が生まれ、分離感覚は払拭される。クンダリニーは下位のレベルから精髓を得ながら上昇するのだが、精髓を得なければ、上へは行けない。〈アージュニヤーナ・チャクラ〉に達しない限り、悟りも眞の自己もない。多少の超能力は得られても、悟りには至らない。クンダリニーが目覚めると同時に、臍下の蓮華は花開く。この蓮華は眠った状態で全心身に存在する。クンダリニーの目覚めと内なる太

陽の昇天、どちらも同じことだが、この知の太陽が昇った時、蓮華は自ずから開花する。我々はリアリストだ。実証なしには何物も受け入れではいけないと。

師父は、話しながら、臍の周辺を幾度か手で押しておられた。すると、何と、臍腺の辺りが開き始め、中から美しく色鮮やかな紅い蓮華が現れたのである。蓮華は次第に開花していき、一同はその芳香に酔う程だった。師父は仰った、「《ブラフマーは、ヴィシュヌの臍の蓮華から誕生する》。こういった類の古代の記述は全く正しい。クンダリニーが目覚めなければ、蓮の華は開花しない。その結節点は臍の中にある」と。

〈マハーシャクティ(偉大な力)〉の〈リーラ(戯れ)〉

また別の日、師父は〈目撃者〉と〈リーラ(戯れ)〉の本質について語られた。「師父の語られる〈マハーシャクティ(偉大な力)〉は、〈グナマイ・ブラクリティ(原質全体)〉と、どういう関係にありますか?」との私の問いに、師父は答えられた、「息子よ、〈ブラクリティ〉と戯れているのが他ならぬ〈マハーシャクティ〉であり、その戯れを目撃しているのも彼女自身なのだ。〈ブラクリティ〉の中には、甘露もあれば、苦汁もある。光と闇、両者が存在する。但し、光ある時には闇はな

く、闇の時には光はない。だが一旦光が点すれば、闇は消える。闇に光を凌ぐ力はない。〈ブラクリティ〉を超えて〈マハーシャクティ〉の聖なる御足の下に詣でた者は、その活動を目撃はするが、当事者ではない。彼は〈マハーシャクティ〉の楽器となり、ただ戯れるだけだ。彼は〈マーヤー〉を超越し、善惡の果実に縛られない。〈マーヤー〉の支配下にある者は、この戯れを現実と思い込み、その夢幻に魅了されてしまう。だが、眞のヨーギ、ジュニヤーニ(覚者)、バクタ(信愛者)ならば、この戯れを戯れとして、ただ目撃するだけだ。ゆえに、幻惑されることはない。ジュニヤーニの眼は純一無雜であり、彼は常に眞の自己を見る。眼には梁なく、誰も彼を欺けない」と。

「迷妄と放逸は、凡夫の特徴です。師父が明らかにしてくださったことは、一を他の幻影を以て替えることにより、両者は共に可能だということです。薔薇はジャバに変わり得る。でも薔薇とジャバは、共に偽り、幻影なのです。薔薇を蔽い、変容の力を用い、そこにジャバの花を咲かせることもできます。しかし、マハーサッタ(全能)を見た者は、薔薇もジャバも両者共に幻影に過ぎないことを知っています。私はそのようを感じています。」

師父曰く、「ほぼそれで宜しい」と。

〈ガーヤトリー・マントラ〉の奇跡

或る日、〈マントラ(真言)〉に関して論じるうちに、〈ガーヤトリー(韻律の一種)〉の話題となった。師父曰く、「〈ガーヤトリー〉の儀式は、 Brahmin にとって、自らの Brahmin 性保持のために、極めて重要だ。今日、 Brahmin の子弟たちは 〈サンディヤー・ガーヤトリー(朝夕の勤行)〉を怠るようになったが、これは良い傾向とは言えない。 Brahmin が自然に Brahmin 性を得ることが望ましいのだ。実は、この世界全体が真の Brahmin 性に掛かっているのだから」と。

私は尋ねた。「〈ガーヤトリー・マントラ〉は特別なヴェーダのマントラです。マントラ自体は、神聖な言葉の集成であり、知の輝きです。その〈ガーヤトリー・マントラ〉には、どのような特性がありますか?」

師父は、「すべてのマントラには、それぞれの特性があるが、〈ガーヤトリー・マントラ〉は、幾多のマントラの中でも特別な存在だ。私は〈ガーヤトリー〉の炎を小さな壇の中に詰めた。それを銅製のポットに移し、心奥で〈ガーヤトリー・マントラ〉を唱えれば、〈ガーヤトリー・マントラ〉に込められた力を知るだろう。銅製のポットをガンガの水で洗い清め、言われた通りにやってみなさい。」と仰りながら、小さな壇に入った赤っぽいものを渡された。

私は、指示に従い、清められたポットを用意し、〈ガーヤトリー・マントラ〉を心中で唱え始めた。手などで直接そのものには触っていなかった。ところが、驚いたことに、唱句の末尾頃になると、それは燃え出し、やがて燃え尽き、灰となってしまったのである。

大聖ヴィシュッダーナンダの教え——愛について

或る日、私(ゴピナート・カヴィラジ、以下G)は、尋ねた。「師父よ、献身に勝る境地といったものはあるのでしょうか？」

V(ヴィシュッダーナンダ) ある。それは愛(love)だ。献身の深い境地が愛と呼ばれる。大いなる歓喜を伴い、〈アドヴァイタシッディ(非二元性の成就)〉として知られている。それは〈絶対者〉の扉であり、〈マハーシャクティ〉或いは〈無限の宝蔵〉に入る門なのだ。更にその後に、言辞や観念の動きさえ名状し難い境地がある。〈無限者〉或いは〈絶対者〉も形相を超えた存在であるにも関わらず、形あるものとして描かれる。二元性も不二性もないのだ。造化の本質、比類なき〈マハーシャクティ〉の姿とは、いわば〈神性〉さえ超えたものだ。《愛なくして、何人もナンドラーラーにまみゆること能はず。》とある通り、愛なくして、誰もこの絶対の境地に入ることはできない。

ヨーガについて

G 正しく成就を獲得するために、何故ヨーガが必要なのか、私たちはもっと正確に知る必要があります。ヨーガと同等の果実を得るのに、他の方法や道はないのでしょうか？

V 息子よ、ヨーガの穴を他の修行で埋めることは不可能だ。ヨーガの実修以外に、心身の永続的純化を実現する方法はない。造化には二種の展開がある。創造と活動だ。創造が目標で、活動が原因である。

二人の少年、ラムとシャムが、炎暑の中、帰ってきたとする。炎暑のためか、ラムは熱を出し、シャムは何ともなかつた。太陽の熱は両者に平等に降り注いだが、一方は病(熱)を発し、他方には何の影響もなかつた。何故か？ 要因が異ならなければ、その効果も異ならない。従つて、太陽の炎熱以外に、何らかの要因がある筈だ。それが発熱の特別の要因となる。太陽の炎熱は、普通の刺激に過ぎない。特別な要因はない。あるとすれば、ラムの体調、或いは〈サムスカラ(条件)〉の結果である。〈ピッタ(消化器)〉が弱っており、太陽の熱で、その弱った器官が影響を蒙り、発熱したのかもしれない。炎暑でなければ、発熱せず、そのままだろう。だが、他の刺激的な要因があれば、状態は発現する。この場合、太陽による熱はきっかけに過ぎない。発熱を例に挙げた

が、つまり要因だけでは十分ではないのだ。〈ニミッタ(要因)〉はさして重要ではなく、特別な何か(物質或いは本質)が活動の主因なのだ。

〈ジーヴア(個人の魂)〉は今や粗悪な感情の虜(とりこ)となっている。決して健全な状態ではなく、病的に蝕まれた状態だ。この病的状態を根絶することが健康であり、個人の魂の治癒なのだ。〈ダートゥ(体液)〉の調和が健康であり、その乱れが病気だ。そこで問題なのが、いかにしてこの病んだ魂を健全な状態に戻すか、ということだ。その意味で、進化の名に値する変化が重要だ。単なる表面的変化では、永続的な果実は得られない。進化に至らぬ者は、行動に於いても進歩は見られない。欲望の対象が眼前にあれば、私の欲望は燃え上がる。怒りの対象が眼前にあれば、私の怒りは湧き起こる。何故か? 唯一の理由は、私の〈ニルマーナ(進化の過程)〉或いは〈ウパダーナ(基層)〉において、欲望や怒りの火種が残存しているからだ。その火種は、適当な機会を得て、一気に燃え上がる。欲望の対象がない処で欲望が起らなくとも、欲望を払拭したとは言えない。官能的な対象が眼前に現れ、五官という五官を刺激し、それでも官能的欲望が起らなければ、初めて欲望の火は消え去ったと言えるのではないか。《心乱す魅惑を前にしても心動かされぬ者こそ幸いなれ。》とはのことである。

それゆえ、自己を浄化しようとすれば、自己の進化や基層の浄化を求めるなければならない。深い浄化なく、表層の動きや振舞いに注意するだけでは、世間からは禁欲の評価を得られるかもしれないが、真の浄化には至らない。人工の禁欲ダムなど、欲望の奔流の前では、何の用もなきない。根底から浄化する唯一の道こそヨーガなのだ。因みにいわゆる粗雑な身体(肉体)は欲望の束に過ぎない。それゆえ、粗雑な身体の感覚が消え去れば、欲望も共に消え去る。欲望から解放される道はこれ以外にはない。肉体意識の根絶と欲望の滅滅こそ、ヨーガの意義であり、知の目覚め、自己実現に他ならないのである。

〈マハーピルシャ(偉大なる魂)〉をいかに認識するか？

G 〈マハーピルシャ(偉大なる魂)〉とは、誰のことを言うのですか？私は〈マハーピルシャ〉を信じていますが、どのようにして彼を認識できるのでしょうか？誰もが疑いもなく〈マハーピルシャ〉と信ずるに足る特徴や指標のようなものはありませんか？今日、世界は余りに迷妄に蔽われ、世人は常にその罠に直面しています。ババ(父)よ、憐みを以てご教示下さい。

V 息子よ、花が成長して蜜を湛える時、誰が蜜蜂にそれを知らせるだろうか？自然の中に生きる者には、自然自体が教えてくれる。我々は

人智を弄して自ら迷妄の穴に陥っている。かくも単純なことを複雑にしているのが人間なのだ。特徴や指標など求める必要はないのだ。

子供は母親を即座に認識する。心の中に愛があれば、愛してくれる者を即座に理解する。何の疑問も議論の余地もない。花は自ら開花の時を知り、鳥は自ら鳴く時を知る。誰に教わることもなく。何かを心底より求める者は、それを得るまでは満足しない。寝ても覚めても、夢の中でも、常に求め続ける。それが現れた時、紹介が必要だろうか。瞬時に求めていたものだと分かる筈だ。

同様に、個人の魂の中に自立心が目覚めれば、翫足の思いで大覚者を探し求め、竟に大覚者の教えに触れるや、瞬時に自身の目標を知ることになる。その特徴と照合して認識する必要など、ありはしない。事物は自然に則るが、認識もそうだ。外的特徴との照合によって認識しようなどというのは、戯論に過ぎないのである。

真のヨーギの驚くべき力

Ⅴ 厳しい修行を通して、身体の根源的変容が起こる。分子レベルの変容さえ可能だ。精神が浄化されれば、いかに粗雑な身体と雖も、既に世人の身体とは異なっている。修行者は、繰り返し同一体の中に生き、しかも長期に亘るため、その身体には幾多の聖なる徵(しるし)が現れる。

〈クンダリニー〉が目覚めた者、ヨーガの境地が進み、成就した者は、その外見にも何か特別なものが現れる。つまり、その者のヨーガ道成就の成否を写真等の外見だけで知ることができるのだ。ヨーギ(覚者)、ロギ(病人)、ボギ(享楽人)の区別も、一瞥すれば瞬時に分かる。なお、ヨーギの前頭部には変異が生じる。

また、〈クンダリニー〉が目覚めた者、〈スシュムナー〉が開いた者の身体からは、蓮の芳香が発するようになる。蓮の香りは常に呼吸と共に流れ、そこに水を注げば、その水は蓮の香りがする。

ヨーギは、普段の生活において鼻孔を介しての呼吸は行われない。臍と皮膚の毛穴を介してのものとなる。のみならず、世人のように外気を幾度も取り入れる必要はない。外気を取り入れたならば、臍の蓮座で浄化され、残りは外部に排出される。この清浄な気は永く体内に留まり、常に体内を循環する。故に、ヨーギは外界と関わる必要がない。例えば、欲望や怒りといった情念の勃興や感情の動きは、すべて外気との接触によって生じる。外気との関係を制御できた者は、いかなる状況においても、自らの自律性と集中力を失わない。外界と接触しても、感覚を刺激する対象に囚われることはないのである。

ヨーギたる者、その身体も〈シッダ・デハ(靈的精妙身)〉と化し、自らの意のままに扱うことができる。例えば、精妙身となり不可視となる

も可能、そして再び伸長して大身になるも可能だ。これが世に言う〈アニマー〉と〈モヒマー〉だ。だが、身体だけではない。彼はまた、身体のどの要素も、あまつさえ外部の事物さえも、自由に制御したり拡張したりすることができる。或いは身体を軽くしたり重くしたりすることも意のままだ。事物をバナナの中身を取り出すように壊すことも、不活性化し分解することも可能だ。また、微細な臍の穴や皮膚の毛穴から、外部の事物を体内に取り入れることもできる。大きなもの、いかに巨大なものでも、何の支障もない。

或いは、幾多の身体に分身し、同時に異なる場所に現れることも可能だ。望みさえすれば、いかに堅固な遮蔽物であろうとも、通り抜けるのに何の障害もない。ヨーギの身体には文字通り凄まじい力が蓄えられているので、何物かがその身体に触れるや否や、瞬時に破碎されてしまうことがある。ヨーギの意志ではないが、自然現象で仕方がないのだ。だから毒蛇もヨーギの身体を毒牙にかけることはできない。ヨーギの身体の炎によって焼かれ、灰となり、死に至るのである、ヨーギが高所から落下したとしても、地上に叩きつけられるようなことはない。身体が垂直に落下を始めると同時に、身体中の清浄な気が上昇運動を開始するからだ。

ヨーギの双眸には強力な炎があり、彼が何かに強く視線を向ければ、瞬時に対象は燃え尽き、堅固な石や鉄でも粉々に破壊されてしまう。修行者の眼には、ヨーギの双眸の中に神像がありありと見える。ヨーギが深く静かに定中に入れば、その身体から周囲を照らす光炎を発し、暗室も十分明るくなる程である。

ことほどさように、ヨーギには幾多の驚くべき特徴があるが、順次挙げても尽きることはない。ヨーギは無畏に留まり、感覚を統治し、真実と愛に溢れた人格を有するに至る。これらの特徴も世人が〈マハーピルシャ〉を認識する際の目安にはなる。だが、これらの要素のみで真実が明らかになるとは考えない方がよい。いずれにせよ、無知ゆえに〈マハーピルシャ〉は存在しないと臆断するのは愚の極みだ。

〈プラナーヴァ〉について

G すべての人に〈プラナーヴァ（オーム等の真言）〉は効験がありますか？

V 否。女性の身体、低カースト・アウトカースト（シュードラ）の身体は、〈プラナーヴァ〉には適さない。何故適さないか、以下に示そう。長い苦闘を経て、〈プラナーヴァ〉の顯現ゆえに、ブーラーミンの身体は自然と光り輝き、〈プラナーヴァ〉を受ける準備ができている。〈プラ

ナーヴァ〉の恩恵を受けないシュードラが達するのに永年の努力を要するが、〈プラナーヴァ〉の効験を蒙るブーラーミンは若年にして至ることができるのだ。シュードラは〈プラナーヴァ〉のような聖句に馴染まないので、彼らに〈プラナーヴァ〉を授けることは、むしろ害になる。女性も同じことが言える。女性の身体の特殊性ゆえに、たとえ高位ブーラーミンの血族であろうと、〈プラナーヴァ〉を受けることは女性には適さない。妊娠が可能な女性の身体は〈クンダリニー〉の力が発現する上で障害となるのである。

だが、常に銘記すべきは、〈サンスカラ〉或いは過去生からの条件等が現前すれば、ある時期に〈プラナーヴァ〉が内より目覚め、〈ビージャ・マントラ(種子真言)〉が花開くことがあるということだ。無論、極めて稀だが、不可能でない、覚者マタングや偉大な女性マイトレーヤやガールギーを想起すれば、足りる。種子があれば、〈プラナーヴァ〉は顕現する。〈プラナーヴァ〉を授けることなく、適切な条件の下、種子のみを授けることも可能だ。だが、通常は〈プラナーヴァ〉なくして、果実を得ることは難い。〈プラナーヴァ〉を通して、〈ニルヴァーナ〉即ち悟りに至る可能性も生まれるのである。

マントラの力

G 〈プラナーヴァ〉或いは他のマントラは究極のものですか？

V マントラは〈プラナーヴァ〉同様、すべてが臍から生ずる。〈ムーラーダール(基底)〉から、と言ってもよい。多少でも〈クンダリニー〉が目覚めれば、原初音と共にエネルギーの奔流が〈スシュムナー〉管の中を上昇し始める。同時に、別の流れが〈サハスラーラ〉から流れ出る。この逆流する両者は〈アージュニヤーナ・チャクラ(眉間に位置するチャクラ)〉で合流し、明るく微かな炎光を発する。外に現れる時は、眼睛の前に光として現れる。

〈ナビ・ドーティ〉や〈キラート・ドーティ〉を実修しているヨーギの場合、ナビ・クンダ(臍)を通して、光の流れが自然に縦列となって〈シヴァ〉の王国を目指して動き出す。その流れは、脈管に沿って湾曲し、身体の最奥部へと入っていく。外には、弓型の白く輝く光となって顯れる。マントラの効験が外部へ力強く現れる時であり、周囲の人々にとっては意識を解放する契機ともなる。息子よ、私の体内もしくは蓮華の花弁に現れることは、何であれ、私自身或いは他の人にも分かる形で外にも現れることになる。だが、これらの秘儀を、その資格のない人たちに示すことは、避けなければならない。

無相の光と有相の神

G 今お話になった光ですが、それはマントラ自身の顕現なのですか？

V 無論、そうだ。マントラの技法を通してのみ、〈ジョティ・ルーパ（光明）〉は顕現する。聖なる光だ。修行を怠らず続けると、今度は光の中に形象や神像が見えてくる。実は、光に見えるものは、その形象の光輪であり、神像として現れる稠密な光の集まりなのだ。本質上、蒸氣と氷に何の差異もないと同様、光と像には何の違いもない。遮るものがあれば光として現れ、遮るもののがなければ像として現れる。至高意識が両様に現れるのだ。光明は形なきもの、神像は形あるものと考えるかもしれない。だが、有相と無相は異ならないことを銘記すべきだ。

〈アーカーラ（形相）〉あれば、〈ニラーカーラ（無相）〉もある。ゆえに、形あるものを通して、無相に到達できる。形に執着する心配などは不要だ。また、無相と言われるものの中にも無限の形象がある。すべての形象は、均衡を得た時に形象なきものと化す。それを〈ニラーカーラ〉或いは〈無相〉と称し、無限の形象（有相）と何ら変わりない。一方、形定まらぬものは、特定の形象を持たず、或いは定かではなく、実質的に無形となる。それゆえ、神性を、形なき光、純粹意識、或いは特定の形象を持った光と観ることは、誤りではない。そして、その神像は、修行者や信者の望み通りに輝くのである。〈無相〉が無限の形象の平衡状態だとすれば、特定の形象には縛られない筈だ。では、何故信者

の望みに応じて、あらゆる種類の形象を探らないのか？ それは、マントラを通してのみ光や形象が形成されるからだ。マントラは神性の〈スヴァルーパ(形象の本質)〉なのだ。実に、語り手と語られるものは別物ではないのである。

神的存在の是非

G 神像が眞の神に転ずることがありますか？ 多くの人が神を見たと言っていますが、信者の想像ではないという証拠が何かあるでしょうか？ 夢中に神が現れることがあります、それは現実ではないと、誰もが知っています。同様に、瞑想状態で観たことも虚妄なのでは？ 強く念ずれば、その思いに応じて神像(ムールティ・ダルシャナ)を結ぶに至るかもしれません。眞実はどこにあるのですか？

V それが〈ビージャ・マントラ(種子真言)〉が必要な所以だ。胚種が十分に強ければ、土に播かれ、成長し、樹木になる。殊更樹木のことを案じなくとも、種子を土に播けば、特に障害がない限り、発芽し、樹木となる。同様に、種子に意識を向ければ、つまり修行し、力を蓄えることにより、神性は〈ビージャ・マントラ〉から成長し、その姿を顯すだろう。神性の中身や文字への集中などは必要ない。成長の過程で、その眞の神性を顯すことになる。単に神像上に思念を凝らすだけでは、眞実

の顕現は難しい。我々がこの世界で物事を真実だと認識するのと同様に、神的存在も実在する、ということだ。

神の顕現について

G 修行者は、普通に神的存在と話すことができますか？ つまり神的存在がその神性を具象的に示すことができるのか、ということです。そうなれば、神的存在を想像に過ぎないと片づける訳にはいかないと思うのですが。

V 息子よ、全世界はマーヤー(幻影)の展開に過ぎない。今、我々が見ていること、考えていること、話していること、そのすべてが虚偽なのだ。さりながら、同時にすべてが真実の形象だとも言える。世界の万象が真実であるように、神的存在も真実なのだ。神が顕れる時、神から話しかけるだろうか？ 信愛者が願えば、その願いに応える。常に信愛者を正しい道に導き、慰め、心からの願いに応える、大抵あらゆることを為し給う。我々が語り、交わるように、神との交わりもある。時には戯れもあるかもしれない。このことを疑う余地はない。信愛者は彼に触れることもできるし、恋人のように抱擁することもできる、神が母性の姿で顕れれば、信愛者は彼女の膝の上で眠ることもできる。信愛者が彼ま

たは彼女を装いたければ、その望んだ装いで顕現する。神の姿は、まさに信する者の願いに応じたものなのである。

《神性のみが神性を挙す》

G 師父よ、神を観た個人の魂にはもはや願いはなくなるのでしょうか？

V 真に得たならば、更に何を望むのか？ とは言え、願いを得るにも秩序がある。究極に到達しない限り、それへの願望は残る。が、究極に至れば、すべての願望は一掃される。マントラの極みは〈プラフマ〉の光輝に転じ、〈サーダク(行者)〉自身が神となる。祈祷の中、行者自身が炎となり、自身を脱して、炎と一体となり、その光輝を実現するのである。〈ニヤス(信)〉が正しく満たされれば、心身にマントラが遍満する。だが、これらすべてはヨーガ行如何に掛かっている。ヨーガという聖なる道を永年に亘って怠らず歩み続ければ、その心身は神性を帯びる。神性の光輝、形姿、力、存在、そのすべてと一体になるのである。

マントラ力の恩恵と効験により、修行者自身が修行の経路となる。とは言え、そこには微妙な差異がある。修行者は行に励みながらもこの差異を持続する。《神性のみが神性を挙す》とは真実だ。だが、信者と信仰の対象たる神の間にこの差異が存在するのも真実なのである。

〈マントラ・ヨーガ〉について

G 師父よ、マントラなくしてヨーガの道を達成することはできないのでしょうか？ 〈マントラ・ヨーガ〉は〈ラヤ・ヨーガ〉〈ハタ・ヨーガ〉〈ラージャ・ヨーガ〉といったヨーガとは、かなり趣きが異なります。何故マントラはそれ程重要なのですか？

V マントラなくして達成は不可能だ。心を打破し克服する技術がマントラなのだ。マントラの骨子は、精神の懈怠を一掃し、意識を強化することである。そして意識を覚醒させるいかなる方法を採ったとしても、マントラの助けを必要とする。というのも、〈プラフマ〉の道、〈スシュムナー〉の道が開かない限り、果実は得られないからである。

信と呼吸の関係

G 師父は日頃説かれています。呼吸が去った時に、信愛が興る、その前ではない、と。では。信心や信愛を持つ知者には、呼吸はないですか？

V 然り。何の疑問があろうか。呼吸ある処、不信が生じ、他念が興り、幻想の世界を演出する。だが。呼気がなければ、気は〈スシュムナー〉の中に留まり、主体や自我といった感覚は起こらない。不信は消え

去り、叡智と信愛が生まれる。すべては大威力の楽器であり、大自然の指揮に従い、グルの力に任せる、これが信託であり、避難処であり、自己放棄なのだ。その時、スシュムナーの中の気は〈レカカ〉と〈プーラカ〉の法則に従い、流れ始める。つまり、外気の出入はなくなる、ということだ。この件に関しては、〈アジャバ〉の神秘を語る際に、更に詳しく話すことになるだろう。

我々は、外界と接触を持つや否や、異物と不信が生じる。それは粗い外気のせいだ。そこで、外気の吸入を止めれば、不信は消え去る。と同時に、精妙の気がスシュムナーの中を流れ始める。この流れは、明るく自然なものなので、障礙ではなく、英知を生み出す。信の深さが極まれば、生物的呼吸もなくなる。これが〈得果〉の境地だ。その時には、結実すら留めない。信と不異は同じことだ。これが究極の境地なのである。

「安易に人を信ずる勿れ」

G 師父が「安易かつ早急に、人を信用するな。さもなければ、間違いなくお前たちは騙されてしまう。」と話されるのを、常々聞いてきました。これは、文字通りのご教示ですか？

V 無論。これは真実なのだ。未だ光明を得ていない人間の信仰は盲目ゆえ、間違いなく錯誤に絡め捕られてしまい、常に苦しむことになる。しかも他の誰かが苦しめるのではなく、他ならぬ自分自身でわれとわが身を苦しめるのである。思慮深くあることが重要だ。実際、真智に至るまでは、精神は不浄のままだ。精神には苦の種子が残存し、それゆえ世界の至る処で苦悩に苛まれる。誰もが無知なる者を蔑む。自分の精神、自分の感覚だけで、真実への道を示す人は誰もいない。誰もが思慮もなく衝動的に振る舞う。だが、その精神と感覚の持主も、〈ジュニヤーニ(覚者)〉をないがしろにはできない。何故なら、光明を得た人の場合、その経験は感覚を経たものであっても、〈プラフマ〉に彩られ、精神を通して得た光明も〈プラフマ〉の精神だからだ。それゆえ、感覚等を経たものであろうが、彼は常に〈プラフマ〉を体現しているのである。彼を前にして虚偽は耐えられない。いかなる状況、感覚の制御或いは盈満いずれにしても、彼の〈プラフマ〉体現を脅かすことはできないのである。

世間の人が思慮なく何でも受け入れるのは全く感心しない。その強迫的な思考は支離滅裂だ。常に論理的に考えるべきである。不合理はいけない。誤った主張は思想とさえ呼べないのである。

迷信について

今日の社会は、迷信に蔽われている。迷信や非論理的な考えは常に排除されるべきだ。いかに多くの人が迷信に基づく地獄に直面しているかは筆舌に尽くし難い。何故かかる迷妄を信じてしまうのか？ 何事も検証なしに信じてはいけない。持てるすべての方法を用いて検証するのだ。すべてを試み、観察する。その後初めて検討にとりかかるのである。

カラスが自分の耳を持ち去った、と聞いて、すぐにカラスを追い駆けるのは馬鹿げている。先ず、自分の耳に触れてみて、本当にはないのかを確認すべきだ。もし無ければ、その時初めて、カラスがある特定の時間と場所に飛んできた可能性を考えてみる。次に目撃者を探す。だが、万が一目撲者がいたとしても、その人を信用できるかどうかは別問題だ。これらの作業を怠りなく済ませ、更に熟考して可ならば、初めて信じる準備ができたと言ってよからう。だが、これほどの作業を経たとしても、その信は真実とは言えず、その人の限界は超えられないである。これだけの吟味を経て得た信であっても、虚偽であり得る。無論、世間的にはその過ちを後悔するには及ばない。十分吟味した後に信じたのだから。迷信の場合、精神は懶惰に陥る。考え、吟味した後に、他人に頼るのは、怯惰の徴だ。自然に信仰が起これば、詮議は去ってしまう。必

要ないからだ。だが、自然に信仰が起こる前に、正しい思索と正しい理性が絶対に必要なのである。

真のヨーギに不可能はない

G 不可能事を信じることは迷信ではありませんか？ 多くの人が疑うことなくあり得ないことを信じています。これは迷信の兆候ではありますか？

V 可能・不可能の是非、その指標は何か？ 《サルヴァム・サルヴァートマカム》。すべては世界全体の現象であり、ゆえに世界全体を含む。のみならず、世界は〈アートマ〉の表現であり、〈アートマ〉は世界の表現である。見える者には見える。力あり、真理を知る者(タットヴァジュニヤー)に不可能はない。知の眼の梁が落ちれば、絶対の力の莊嚴を得る。今は思いも及ばぬことも、かの力によりやがては実現する。それゆえ、《思慮を絶するものに対して、己の愚を以て語ること勿れ》。思慮も及ばぬ聖なるものを、己の分際で決して論じてはならない。その力を有する者、それがヨーギであり、〈ブラフマ〉の見者、自然の神秘の知者である。彼は〈マーヤー〉の主の恩寵により、〈マーヤー〉を超越し、〈マーヤー〉を支配するに至る。その彼に不可能があるか、

かくしてヨーギは、神人となり、〈ヨーギシュワル〉の称を得る。即ち、不可能を可能にする力を得たのであり、その事実を直接示すこともできる——但し、彼の力の範囲内で。修行と共に、その知力は増大するが、あくまでその範囲内で、ということだ。ある者には不可能でも、他の者には可能かもしれない。更に上には上がある。力の障礙が消えれば、可能性の王国は自然に拡大するものだ。力の蔽いがとれ、自由に達すれば、すべては可能となる。真のヨーギにとって、〈マハーシャクティ〉の恩寵の下、不可能はないのである。

世界は驚異に満ちている

実際、この世界には何ら驚愕するようなことはない。とは言え、すべてが驚くべきことというのも事実だ。天性のヨーギたるもの、いかなる事にも動搖することはない。彼は、幾多の相矛盾する宗教の合流点、すべての感情の発生源に到達し、すべての成就を見る。空間、時間、すべての存在が現象し、その存在のあるべきように顕現する。その時、他は潜象となる。潜象とは言え、すべては存在する。単に、その障礙ゆえに現象しないだけだ。この障礙或いは制限を、偉大な意志力或いはある科学的技法によって取り除くことができれば、いついかなる処においても開封することができる。私が幾度も様々なやり方で示してきた通りだ。

見者たるヨーギは、叡智の眼を通して、未顯の潛象をも観ることがで
きる。彼が望めば、いかなる未顯の印象をも開封することができる。こ
の未顯のものとは種子に他ならない。それゆえ、知者はいかなるものに
も惑わない。あの自然の神秘的活動でさえも、彼の前では隠すことな
く、逃げる術もない。彼は、この世界の創造・保持・破壊のさまを観照
する。それゆえ、なにものにも執着しない。常に自らの本然に留まり憩
う。〈インドラジャール(幻影の網)〉に囚われ、自己の本質を見ること
ができないのは、自己喪失の徵だ。それゆえ、真のヨーギ、真の知者
は、超然としてすべてを観照することにより、無執着と解脱を得るので
ある。

真のヨーギ、知者は、この世界のすべてが実に驚くべきものだと感じ
ている。彼は、一微塵の中に無数の宇宙の存在を見る。この世界はあま
りに親しく、我々の目にはさほど驚くべきものには映らないが、〈ジュ
ニヤーニ(見者)〉の目には真に驚くべき姿として映じる。彼は、至る處
に〈マハーシャクティ(偉大なる力)〉の戯れを見る眼を備え、その演劇
を見て驚嘆する。のみならず、最微の原子にもこの偉大なる力を感得す
るのである。

例えば、一滴の精子からこの驚異に満ちた人体が生まれ、小さな種子
が巨木に育ち、微かな火花からダーヴァーナル(大火災)は起こる。開花

や果実の時にのみ造化の神秘を感じる世人とは異なり、見者はその未顯の過程にも驚異を感じるのだ。この世の一瑣事が大破滅を告げ、瞬時の一瞥が全人生の存在を決める。素晴らしいとは思わないかね？ 問題や不幸としか思えない事柄の中に、大なる恩恵がある。真智の眼光を以て見れば、この世界には驚異ならざるものはない。しかも、その驚異には果てがない。竟には、かの〈マハーシャクティ〉の〈リーラ(戯れ)〉を目の当たりにし、歓喜に躍り、至福の感情が心底から湧いてくる筈だ。ただ〈ジュニヤーニ〉なくしては、この世界の驚くべき本質も驚嘆すべき活動も秘められたままなのである。

即ち、この世界は何ら驚愕すべきものはないが、それでもすべてが絶対の驚嘆に満ち溢れている。この即今の中に、全過去と全未来が包摂されており、大海が一滴水の中で躍動している。小なるものは大となり、大なるものは小となる。ただ表現の様態であり、深く参入すれば、不可能は存在せず、瑣事が全宇宙なることを知るに至るのである。

ヨーガの果実(超能力)は成果なのか、それとも魔障なのか？

質問者 「智の成長は修行次第だ」と師は度々説かれます。通常の意味でのヨーガの顯現も修行から生まれると思います。一方、修行の果実(ヨーガの顯現)は智に反し、瑣事に過ぎないと言う人もいます。魂の主

要目標は自己智と解放ですが、それは超能力(修行の果実)とどんな関係があるのでしょうか？

V 息子よ、〈ヨーガ・ヴィブーティ(ヨーガの顯現)〉と呼ばれるものは、ヨーガ修行の途上に何か障りがあれば、顯現することはない。鉄塊を灼熱化できる力があれば、奇跡と言えよう。ヨーガの顯現(奇跡)とは、〈パラマートマ(至高の魂)〉の顯現の一形態である。そして個人の魂が解放と共にその本性を悟り、至高の魂と一体となることにより、その力は目覚め始める。ヨーガの奇跡は、決して他力本願で得られるものではなく、自ら奮励努力して得られるものなのである。

三つの〈シッディ〉

G パタンジャリは、「〈シッディ(超能力)〉は発現時には成果だが、三昧中は障害となる。」と述べています。ヨーガの果実たるシッディが魂の自然な発現であれば、障害とは言い過ぎのような気がします。パタンジャリ派によれば、ヨーガの顯現、シッディ(超能力)は、完全純一の自己知実現の前に出現する、としています。彼らはあくまで直觀知と解脱の信奉者ですから。

V 息子よ、アートマが元来全能の存在でなければ、その力の発展は阻害されるだろう。自己とその力の関係は、火と火力、蠟燭と炎の関係に

等しい。自己は全能存在の靈屋(たまや)であり、その力の閃光が自己内に輝く諸力の合流点なのだ。神々の世界、ガンダルヴァ(天上界)、人間界、他のいかなる世界であっても、そのすべての力は自己の力なのだ。無限の自己の力は、エゴの重荷と光明の差異に基づき、異なった力の形態で顕現する。個人の魂に力の欠如がある限り、その桎梏と慣性という活動は続く。当然エゴの存在も継続する。しかし、エゴの潮流が衰え、慣性の蔽い即ち感情が収まれば、純粹な自己の目覚めと共に、自己本来の驚くべき力が次第に顕現し始めるのである。

さて、この証悟或いは光明には、三つの段階がある。理解に資するため、仮に〈シッディ〉、〈マハーシッディ〉、〈アティシッディ〉と名付けたい。〈シッディ〉の場合、力は二つの道を通して獲得され、魂の中で、認識と愉悦を伴い、可視の形で顕れる。第二の段階は、進化した魂と分離のない状態から生まれる。その際、無限の力の中にいかなる外的力の閃きもなく、魂の中に内在的光輝として安らっているだけだ。その時、魂は自らの中に本来の姿で全き安らぎの状態で存在する。この段階が〈マハーシッディ〉である。君たちが〈カイヴァリヤ(救済)〉或いは〈アドヴァイタ・スティティ(不二一元境)〉等と呼ぶものである。

だが、更に上がある。不二一元境から発した力の外部への突出、二元性の中での上昇が、〈アティシッディ〉の特徴と言える。例えば米穀の

ように、自然そのままで未調理の状態を〈アシッディ(未発)〉という。それに水を加え、火で炊けば、食べられる米飯に変化する。これが〈シッディ〉だ。この段階では、食され、味わわれる状態で物事は存在するが、一方、食し味わう者とはあくまで分離した状態だ。だが、食べ終わり、吸収され、身体の一部となれば、もはや食物は存在しない。〈マハーシッディ〉とは、この状況に近い。その後、長い時を経て、食物は身体から外部に表出される。この状態が〈アティシッディ〉と言えるかもしれない。

息子よ、〈アティシッディ〉は、修行者が覚醒と制御を同等に受容できる時に花開く。ヨーギは、いかなる境地にも囚われない。二元であろうと一元であろうと、ヨーギを縛るものは何もない。と同時に、ヨーギはすべての境地の観照者であり、達成者でもあるのだ。

未だ〈マハーシッディ〉に至らない〈シッディ〉の行者は、二元性に留まり、行者とその没入する対象は別々だ。とは言え、世間一般の行なき信者に擬えるような愚を犯してはならない。行なき信者とは、自らの祈りの対象、尊崇の対象すら知らない者たちのことだ。だが、〈シッディ〉の境地とは、修行者が願ってきたものが実現し、ヨーギの眼には何のヴェールもないことを意味する。但し、達成は達成だが、不異には達していない。つまり、修行者とその目標とするもの間にはまだ分離が

あるのだ。だが、悟境の進むに連れ、この分離は消え去り、信愛者との対象は相互に融合し、一体となる。もはや拝する者も拝される者もない名状し難い光輝燦爛たる自己のみが存在する。これが〈マハーシッディ〉の境地である。この不二の境地が最高で、これ以上の境地はない、と考えるかもしれないが、さにあらず。この段階では、欲望の閃光さえあれば、再び初期の二元状態が生まれてしまう。欲望の火種がある状態は、ヨーガの道においては未熟だと知らねばならない。

覚醒と制御、二元と不二、活動と不動、これら両態を超越した者こそ、あらゆる状態、あらゆる道に存在することになる。自らの全存在がこの境地に至ることが〈アティシッディ〉の特徴なのである。〈アティシッダ・ヨーギ〉は創造的ながら不動、永遠に不動ながら恒常に精励、彼は何にも縛られない。「自由な人間」という言葉では、とても言い尽せない。神の御意志で創造が行われる時、神御自身がそのことに束縛されるだろうか？ 神御自身の存在と共に流出したものに神御自身が縛られると思うかね？ あり得ない。神が何らかの力やエネルギーを創造した時、その力は自らの創造者と分離して発するように見えるが、実際は分離など何処にもない。分離の時には分離が表われるが、その分離の中でも一体性が存在する、この両態が眞実なのである。

さて、これで君の疑問に対する解答になつただろうか。魂が分離している限り、シッディは障害として現れる。この段階では、愛着や誘惑、或いは微妙な形でのエゴが残存する可能性がある。分離、二元性があるからだ。実際、二元的感覚のある限り、無畏の境地に達することはできない。この段階におけるシッディが障害だというのは全く真実だ。この途方もない力が自己の力として反映するまでは、シッディは、不二一元知に至る道、そして無知を一掃する行道における障害物として存在することになる。だが、自己知の恩寵により、この途方もない力が自己の力に転じた時、それはもはや別々の存在ではなく、魂の自然な輝きとなる。のみならず、それが自己の本質に一旦溶融いし、〈マハーシャクティ（偉大な力）〉の恩寵により再び姿を顯わせば、〈アティシヤクティ〉の実現となり、もはやその間に二元分離の状態はない。実に、二元性と不二一元を作り上げる思考の罠から脱しない限り、〈スヴァータントラヤルーパ・ニルヴィカルパシッディ（無漏解脱）〉に至ることはないのである。

〈アティシッディ〉について

G 師父が述べられた〈アティシッディ〉が〈シッディ〉の最高の段階ですか？ それとも、それ以上の段階があるのでしょうか？

V 息子よ、それでも至高という訳ではない。この段階でも欲望が残存するからだ。欲望があるということは、欠如があるということだ。欠如がなければ、欲望も起こらない。ただ欠如があるといつても、世間一般の欠如とは異なる。ヨーガ道の欠如は人間の本性ゆえに起こるが、忽ちに消滅する。この欠如からの解放は、この上なき至福として文献中に描かれている。この欠如感こそ端緒であり、その解放は統合である。その本質において、この開始と統合は、円環をなす無限の造化遊戯を演じる。真に渴していなければ、水の真味など分かる筈がない。水だけでは甘露を味わえない、のどの渴きが必要なのである。甘露の大海に居ても、切実さと実践がなければ、それを味わう機会はあり得ない。恰も甘露の大海に居ながら、切迫感なきゆえに空しく甘露を求めるようなものである。即ち、〈アティシッディ〉とは、実に〈マハーシャクティ(偉大なる力)〉によるエクスタシーの達成なのである。そして、ここから意志の力が成長するのである。

言葉によるこの境地の説明は無理だ

G 師父のご教説により、この〈アティシッディ〉という境地が、意志力の活動的状態だということが分かりました。では、この至福の状態の後には、どのような光景が広がっているのでしょうか？

V この境地を得て初めて初めて真のエクスタシーの何たるかが分かる。これは実はエクスタシーも非エクスタシーも超えたものだ。〈母なる自然〉の膝の上で、その忘我の法悦に浸り、その法悦が去った後に、この二元と愛着を超越した境地が誕生するのである。この境地は名状し難い。これ以上、言葉による説明は無理だ。

〈シッディ(超能力)〉の種々相

G 師父よ、お教えはあまりに深遠な境地に至りました。もっと卑近なことからお尋ねしたいと思います。願わくは憐憫を以てご教示下さい。師父のお説きになった〈シッディ〉ですが、そもそも〈シッディ〉は一つなのですか、それとも多種なのですか？多種ならば、幾種類あるのですか？また異なった〈シッディ〉を達成する道も各々異なるのですか？

V 真実を言えば、〈シッディ〉は一つであり、かつ完全なものだ。この点に疑問の余地はない。だが、様々な形態に合わせ、個々の名称を与えた方が、世人には理解し易いだろう。先述の〈シッディ〉、〈マハーシッディ〉、〈アティシッディ〉に関しても、他の名称が考えられる、例えば、〈クリヤーシッディ〉、〈ジュニヤーナシッディ〉、〈イッチャーシッディ〉というように。パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』の

「ヴィブーティパッド(神通力の章)」にある 〈サカルカーンダシッディイ〉 などは、その大部分が 〈クリヤーシッディ〉 に含まれる。

心身を浄化し、自由に制御できるようになれば、様々な方法を通しての活用が可能となり、殊更努めることなく容易にその能力を発揮することができる。アルファベットを一通り学べば、殊更言葉を調節したり分析したりすることなく、それを組み合わせたり省いたりして言葉を作ることができると同様に、〈シャクティタットヴァ(力の源)〉、純粋な真理に通じた者は、この粗雑な世界においてもすべてを可能とする力を持つのである。すべての過去や感覚、様々な修行を完全に制御できる境地とそこから誕生する 〈シッディ〉 を得た者こそ、真のヨーギである。

古来ヨーガ文献には幾多の 〈シッディ〉 に関する記述がある。例えば、空中飛行、入他身通、読他心通、天眼通、天耳通等々。他に八種のシッディもある。曰く、〈アニマー〉 〈マヒマー〉 〈ラギマー〉 〈ガリマー〉 〈イーシトワ〉 〈バシトワ〉 〈ブラープティ〉 〈ヤトラカーマーヴァサーイトワ〉。異なったシッディは各々異なった方法によって得られるが、〈サティヤシッディ〉 を得た場合は、個々のシッディ獲得の労を要しない。ヨーガ行者がヨーガの道を歩んでいけば、どこかの段階で、全てのシッディが自然と獲得される。但し、不純な動機でシッディを得ようと望む者がヨーガの果実を得ることは決してない。

〈ケチャリーシッディ(空中飛行)〉について

G 師父よ、ブッダやキリスト、シャンカラチャリヤのような偉大な聖者たちは、すべて虚空を移動されたそうです。この〈ケチャリーシッディ〉は必要なのでしょうか？ またこの能力なしにヨーガの道を成就することはできないのでしょうか？

V ヨーガの道において進歩すれば、この能力も増進することは確かだ。このシッディは、風(空気)と虚空の本質に関する能力だ。ヨーギは、各元素の本質を各々一つずつ知る必要がある。そして、竟には開かれた空間の中で留まったり移動したりすることが可能となる。わが息子よ、厳しい修行なくして、真のヨーギになることは無理なのである。

虚空を行く能力は、臍輪開発シッディの特徴

G チャクラ開発に精進するヨーギにとっての目標とは、〈チダーナンダ(至福)〉に至り、その甘露を飲み尽くすことです。究極の力・クンダリニーが目覚め、〈サット(六)チャクラ〉を超え、〈サハスラーラ(千の花弁を持つ蓮華で表象され、真理、叡智、神智という甘露の滴る至高処)〉の輝く月光の只中に至ることです。シッディを得ずに虚空を行くことは可能なのでしょうか？

V 息子よ、臍輪と〈サハスラーラ〉には密接な関係がある。もし臍輪の開発が十分でなければ、〈サハスラーラ〉の凄まじい炎に焼かれてしまふ恐れがある。虚空を行く能力は、臍輪開発シッディの特徴なのだ。クンダリニーが目覚めるためには、臍下叢の諸神経腺を浄化する必要がある。その後、ヴィシュヌ腺の浄化も求められる。

真理は書物からは得られない

G 様々な事柄に関して、知るべきことが未だ多くあります。例えば、意志の力、ヨーゲシュワリヤ(ヨーガの光輝)、身体の元素、臍輪の本質、造化の神秘、科学の秘奥等々。論すべきことがまだまだあるのです。

V ヨーガや〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ(太陽智)〉のようなテーマについては、今は語る時ではない。あまりに深遠で奥が深いのだ。しかし、その時が来れば、全容を語ることもあるだろう。現在語れるのは、ヨーガに関しては若干であり、初步的な事柄、〈サーダンタットヴァ(修行の階梯)〉周辺だが、今はこれで十分だろう。だが、〈ジャガダムバ(世界の母)〉の意志により、後にこれらに関する詳細を語ることになるかもしれない。

幾度も述べたように、単に聞法するだけでは、真理は会得できない。

厳しい修業と精進の継続が必要なのである。ヨーガに関して、知識、実践、科学等、いずれも経典に書かれていることはわずかだ。書物から真理を会得することは無理なのである。

〈サニヤーサ(放棄)〉とは何か

質問者 師父よ、知識、科学、果実等については、いずれお聞きしたいと思います。今は、若干の疑問に対してもお示しを頂ければ、幸いです。

解脱は、犠牲や〈サニヤーサ(放棄)〉なくして不可能だ、と言われています。もし自己知が解脱の要因ならば、〈サニヤーサ〉は必要なのでしょうか？ グルの恩寵があれば、自己知と精神の浄化はいつでも起こり得るからです。そこで犠牲や放棄だけが解脱の条件とは思えないのです。

V 息子よ、では〈サニヤーサ〉とは何か？ 正しいやり方で犠牲を捧げることを〈サニヤーサ〉というのだが、君は犠牲に何を捧げるつもりなのか？ また何故犠牲を捧げるのか？ 捧げるに値する果実があるのか？ 慎思すべき問題である。自分のものでなければ、犠牲として捧げることはできない、捧げることのできるのは自分のものだけだ。わが所有であればこそ。捧げることができるのである。

だが、この世界でわが所有だと言えるものは何一つない。君自身の肉体さえ、君のものではない——愛着を持ち、自身のものだと見做し、幻想により自身の本質と思いこんでいる肉体さえも。君の肉体は、君自身の意志ではなく、自然の摂理に従って機能する。君の意志は未だ十分淨化されておらず、また能力も乏しく、とても自然の摂理を超えて指示を出せるような状態ではない。即ち、君の肉体は君自身のものではないのだ。君の意志によって肉体を得たり去ったりはできまい。意志によって背丈を伸ばしたりす縮めたり、或いは肉体を輝かせたり透明にはできまい。即ち、君は死に打ち勝つこともできず、自身の肉体を制御することもできないのだ。決して、我々は自分の肉体の主人などと威張れる筋合いではないのである。

精神に関しても同様だ。この世界のすべての事物は、君の肉体、精神、感覚を通して、君と密接な関係にある。君が自身の肉体や精神の主人でないならば、この世界の事物もとても君のものとは言えまい。真実は、この世界に真にわが所有と言えるものは皆無だ、ということだ。では、君は何を捧げるのかね？

自己放棄の前に自己充実が必要だ

G では、我々はすべての事物をわがものとしなければならないのでしょうか？ 身体、精神、生命力、感覚といった世界のすべてをわがものに？ 私たちがすべての存在の主人に？ 何故我々は放棄したり犠牲を捧げたりする必要があるのですか？ 犠牲や放棄が最終目標ならば、世界をわがものとする同化吸収にいかなる意味があるのですか？ 無駄なのではありませんか？

V 否、無駄ではない。犠牲なくして、その果実を味わう喜びは得られない。甘露を渴望する者は、放棄しなければならない。《放棄こそが甘露に至る唯一の道》とは事実なのだ。放棄なくして甘露を飲むことは難い。聖なる王国に入るには、放棄という階梯を経なければならないのだ。犠牲と果実の調和の上に、この神聖境が現成するのである。

自己放棄の前に自己充実が必要だ。すべてを同化吸収し、すべてをわがものとしなければならない。即ち、この全世界を造化の靈たる自己に転換させるのだ。この世界は自己のみ。その時、元来すべての存在が自己の展開であることを知るに至る。この世界はわが力の拡張であり、自己の光輝なのだ。その時、すべての存在は君自身に満たされ、君自身は至る処であらゆるものに包まれているのである。自己充実の頂点に於いては、この世界に自己ならざるはなく、全存在が自己の形姿をとる。自己以外は存在しないのである。

この境地に至れば、果てなき無限の感覚が湧き起こる。だが、この感覚はいわば派生的なものだ。その後、他ならぬその自己を無限の中に放擲しなければならない、これが自己放棄或いは捨離である。その果実は、大いなる歓喜或いは甘露の味わいに喻えられる。それゆえ聖なる法悦とも呼ばれる、この無限感は、内在する自己の最奥部に湧き起こる。この至高の恵み、甘露の味わいは、正に偉大なる力・母なる〈ジャガダムバ〉の授乳であり、大いなる豊穣である。母の膝に乗る子供は、自我のすべてを捨て、安らかだ。

だが、この自己放棄、捨離の前には、捧げるべきものの吸收、自己充実が必要なのだ。いかなる光輝、豊穣の果実も持たない者が、何を捧げるというのか？ 彼は単に滅びに至る物乞いに過ぎない。放棄すべきものがないのだから。

全世界を君の心に密着せしめよ。自己を拡充し、自己の力を振起せよ。而してこの力もて無我の境に参入し、至る処に自己の光輝を輝かしめよ。然る後に、この全自己なる世界、古き衣を脱ぎ捨て、無限の意識の大海に投げ入れよ。かくして初めて死を超越した境地に至ることができるのである。

〈プラサード(恵み)〉を受け取る前に捧げなければならない

G それは、〈プルシャールタ(人生の目標)〉の中で、個人の魂が求め
る果実としてのエクスタシ一体験ということですか？

V 然り。それが救済だ。迷妄の魂は、三界の火宅から逃れ、慰藉と平
安を得ようと、不安を抱きながら苦悩と苦痛に満ちた地を絶えず彷徨し
ている。が、真実を言えば、慰藉と平安が得られるところなどどこにも
ない。永遠の甘露を飲むまでは、その魂が落ち着くことはないのだ。だ
が、一旦至福の息吹に触れれば、その彷徨は終わりを告げ、すべての願
求は止み、浮薄の生は終わる。幼児が母の膝に這い上り、永遠の母乳を
飲むようなものだ。

この永遠の獲得は、偉大なる母からの〈ブラサード(恵み)〉だ。人
は、果実を受け取る前に先ず〈神〉に捧げなければならず、永遠の食餉
を得る前に先ず火神(祭祀)に捧げなければならない。その後の果実であ
り、甘露なのである。

〈サニヤーサ〉と智慧の関係

G 〈サニヤーサ(放棄)〉や〈ティヤーガ(捨離)〉なくして、解脱の達
成は難しいとされています。一方、智慧なくして解脱は不可能とも言わ
れています。この両説の意味する処は何でしょうか？

V 既に述べたと思うが、そもそも智慧なくして放棄が可能だろうか？

年齢による放棄は自然な放棄だ。だが、「放棄なくして智慧なし」と言われる時は〈ヴィヴィディヤ・サニヤーサ〉のことを指している。〈ヴィヴィディヤ・サニヤーサ〉は自然な放棄ではなく、道を求める意志が求められる。知識の目覚めによる意志が精神的放棄へと導くのである。

智慧の目覚めと共に

G 行動やヨーガが智慧を目覚めさせ、放棄はその後に来る、ということですね。では、智慧が目覚めたにも拘わらず、豊穣や光輝が育たない、ということはあり得ませんか？ その時には放棄を徹底成し遂げなければならぬのではありませんか？

V 息子よ、智慧が目覚めれば、必然的にその豊穣は増す。神性の感覚が豊穣であり、魂の本質に他ならない。智慧の目覚めと共に、魂を蔽うヴェールが脱げ落ち、魂の本質がその姿を顯わす。智慧の目覚めと共に、光明が現れる。開花すれば、自ずから果実が生じる。これが成果なのだ。果実を獲得した後に、それを犠牲として奉獻する。それが放棄である。その捧げられた果実は、至福の色彩を帯び、聖別される。魂の目覚めがなければ、この至福の境に入ることは難い。先ず魂の本質に目覚

め、次いで鍛錬しなければならない。その鍛錬の極みにおいて永遠を獲得するのである。

魂の本質の目覚めと 〈クンダリニー〉 の目覚めは同じ事だ。ゆえに、
〈クンダリニー〉 が目覚めた後、それを永遠の只中に放擲し、 〈パラ
マ・シヴァ(至高位)〉 と一体とならなければならない。これが、個人の
魂が永遠に至る道である。 〈パラマ・シヴァ〉 と解放された 〈クンダリ
ニー〉 或いは 〈パラーシャクティ〉 が合流し、永遠性或いはエクスタシ
ーが流出する時、解放された魂は、永遠の中でかの甘露を味わうのであ
る。

以上、簡潔ではあるが、われらがババジ(大聖ヴィシュッダーナンダ)
の偉大なる物語をこれにて終えることとする。

大聖ヴィシュッダーナンダの為人と言葉

師父の人生は真に驚くべきものだ。その身体は特異、その靈的修行は
苛烈、すべてが超凡である。明澄な性格、厳しい修行、無限の慈悲、自
由への愛、鋭い知性、これらすべての特質が師父の個性なのである。

師父は語る、「安易に誰をも信ずるな。安易に人を信すれば、欺かれ
るだろう。この世界のあらゆる存在は君に背いている。君のみが君の唯
一の友だ。自己を忘却し、外なる友に惹かれること勿れ。君はこの世界

に自ら拘泥している。迷妄に陥った精神をこの世界から解放せよ。その時、君は深奥において完璧な理想像を見出すだろう。それこそ君が常に求めてきた最愛の者なのだ。人間は自分自身を探し求めて、幾多の道、幾多の生を彷徨してきた。今や、それを得てやっと荷物を下ろすことができる。信とはかくも貴重なものだ。あちらこちらで安易に信を安売りするな。いかなる状況においても、真理、真の実在を求めるべきだ。かくして得られた信は永続する。最初に疑い、後に永続する信に生きることは、誤った信に安住し、後に裏切られる生に勝る」と。

又曰く、「熾烈な〈プルシャーカール(自己修練)〉により、過去の行為は消滅する。自己修練の重要性は測り知れない。ヨーガの実践とは、自己修練に他ならない。自己修練に励む行者のみが、真のグルが指示した道を歩み、与えられた力を十全に鍛えることができ、精神が純化される。絶えざる信仰と自己制御に努め、ヨーガ実践に専念することにより、竟には智慧が覚醒する。智慧の覚醒の後には、純粹な献身が起こる。その献身が成熟の域に達すれば、愛が花開き、エゴは昇華する。世界の〈母〉に至るのは、この愛の道のみだ」と。

世人の称するヨーガなるものは真のヨーガに非ず

師父は日頃より「ヨーガは極めて秘義的なものだ。総じて世人が為す業は真のヨーガではない。この社会で真のヨーガを知る者は極めて少ない」と語られた。師自身は古典と善行を尊重し、世俗のための社会システムに従ったが、情愛のない行為に対しては異を唱えた。又、常に「実践を疎かにして、経典を読むだけでは、万年経ても智慧には決して至らない。経典は道路標識や燈明に過ぎない。実践のみが真理に至る道だ」とも語られた。

師父の人格は、謙虚、素朴、無垢そのものだ。かくも超凡の智慧、神通力、多大な方便を有しながら、妄りに法を説くことは瞬時もなかつた。通常親密になると狎れが生じるものだが、師を知る機会に恵まれた者は、親密になればなるほど益々師に魅了され、無限を眼前にして願望が尽きざる如く、日々眼に映ずる新しい姿を仰ぎ見て、その讃仰の思いは弥増すばかりだった。

かくして、私は師父の日々の行業を見るにつけ、天性のヨーギというものは聖なる力を有している、という確信が弥増した。「すべての人間は、正しい修練と正しい道を歩むことにより、智と力を獲得し、誰でも究極に至ることができる」。これは、師父の聖言である。

人間は本来偉大な存在である。自己喪失という迷妄により、今は忘却しているが、真理の道を正しく歩むことができれば、再びこの事実に気

づくことだろう。これが、師父が度々超自然的な業(わざ)を直接人々に示された理由である。師父の神秘の業を直接見た者は、やがて自分自身もこの同じ全能の力を持ちながら、その力が発揮されないのは、それを引き出す術(すべ)がないからに過ぎない、ということに気づくに至る。そこで、彼は無所有の行者となり、放棄と精進を友とし、外的なものと執着を捨離し、慈愛溢れる神の御許を目指した霊的生活が始まる。而して、全世界と全生類の根源である〈彼〉の許に至った時、個人の魂には達成感が満ち溢れるのである。

超能力開示の必要性について

神性への不信、経典への不信、師や偉人の言葉への不信、すべてが現代社会の凋落の要因である。だが、これらの現象にも理由がない訳ではない。現代では、多年に亘る苦修練行にも関わらず、竟に真理の達成に至った修行者は極めて稀なのである。真理到達の重要性を直接示すことができる師がいないからだ。外向的な人は、自らの常識を超えた超能力の証拠をわが眼で見ない限り、言葉だけでは心中に信を確立することはできないのである。

超能力を示すことは好ましくない、学人に道を誤らせるから、と言う人がいる。また、超能力は瑣事だ、信を置くに値しない、と感じる人も

いる。或いは、超能力への尊崇は、偽りの宗教だ、求めるに値するのは真理のみ、誤った道に誘引することは許されない、と評する者もいる。賢者やヨーギは、マーヤー(幻影)を超越した境地で、自己に集中することにより、かかる力の王国を克服することができる、と信じる者もいる。その彼がどうして超能力を示すことができようか？　この類の意見に応えることには意味がないが、一、二の要点を明確にすることは必要だろう。

〈ヨーガ・ヴィブーティ(ヨーガの顯現)〉について

〈ヨーガ・ヴィブーティ(ヨーガの顯現)〉に関するこの類の論は、私にはすべて曖昧に見える。常人の能力を超えるものはすべて奇跡だが、〈ヨーガ・ヴィブーティ〉ではない。究極の実在に到達し、その中に個人の魂が融け入り、至高の感覚が生まれる。それが〈ヨーガ・ヴィブーティ〉である。それは、この世界に三叉の力、即ち意志の力、知識の力、行為の力に分かれ、顯現する。正三角形の各〈ビンドゥ(頂点)〉が、高められた三叉力として顯現するのである。この三叉力は、分離以前は〈パラーシャクティ(至高の力)〉として、統合された姿でその中心に鎮座している。この中心点に集中することがヨーガであり、そこから発する光

輝が〈ヨーガ・ヴィブーティ〉なのである。この光輝は、意志、知識、行為の形姿で輝くので、意志力、知識力、行為力と称される。

〈プラフマ・ヴィディヤ(至高智)〉に通曉しなければ、何事も達成できず、絶対の調和も生まれず、執着なき目撃者の境地には至らない。その〈プラフマ・ヴィディヤ〉は、ヨーガから生まれる。それゆえ、〈ヨーガ・ヴィブーティ〉は、〈プラフマ(真理)〉の土壌なのだ。実際、ヨーギが〈パラーシャクティ(至高の力)〉の業を借りれば、不可能はありません。即ち〈マハーマーヤー(大幻力)〉の恩寵により、様々な事件や現象の淵源たる〈マーヤー(幻影)〉を支配するに至る。これがヨーガの顯現である。そして〈マーヤー〉を支配する者こそ〈神〉の名に相応しい。これは統合的な顯現であり、全ての顯現を包含する。この境地に至れば、ヨーギはもはやこの境地から転落する恐れはない。

忘失した自己の魂の本源に復帰する上で、ヨーギたちは時に自らの権能と能力を確認するために、その神通力を開示することがある。無論、これも〈パラメシュヴァラ〉即ち〈神〉の御指示によるものだが。ヨーギにとって、これらすべてを開示することに、いかなる危険があるというのか。天性のヨーギには我執も利己心もない。彼のヨーガが崩壊することはないのである。パタンジャリの著作に書かれた〈マドゥマティ〉は、基礎的な部分の記述である。成就したヨーギは、ヨーガにお

いて至高の主 〈パラメシュヴァラ〉 と一体となる。パタンジャリ・ヨーガ体系の第四段階を遙かに凌駕しているのである。

到達したヨーギは活動の主体者であると同時にその観察者でもある
苟(いやしく)も、方法と目標が一致し、不二一元の地平に立たない限
り、ヨーギと称するに値しない。クンダリニー力の向上、智慧の眼の開
発の結果、絶対の 〈シヴァ〉 性に至れば、ヨーガの本質を達成すること
ができる。ヨーギは自らを 〈シャクティ・チャクラ〉 の臍輪に定立し、
無限力と戯れることができると同時に、自らの活動を観察することもで
きる。事実、ヨーギは 〈マハーシャクティ(偉大な力)〉 と一体であるが
ゆえに、彼にとっては戯れの活動とその戯れを観ることの間に毫釐も差
異はない。エゴを自分と思い、自らを自然の展開の主体と看做す者の本
質は空虚だ。だが、 〈プラフマ・ヴィディヤ(至高智)〉 の力によりエゴ
が消滅し、自然を超越した純粹意識の中に自己を確立した者は、いかな
る作業であろうとも、静かな観察者、無心の目撃者として行為を為すの
である。彼の境地にとては、自ら活動することとその活動を見守るこ
とは同じことなのである——同じコインの両面のように。

〈ジュニヤーナガンジャ〉 教程の社会への普及が師父の願い

ヨーガの体系に関して、ヒマラヤのヨーガ道場で修学する科学と化学の教程を、より簡易化した形で一般の人々に普及することが、ババジ（師父）の願いだった。そのため、カーシー・ダームのヴィシュッダーナンダ・カーナン内には、「教育院」と「科学院」が設立された。科学院の建物 자체の建築は既に終わっているが、その上部の青と赤の木造部分がまだ建築中である。この木造室が完成し、正しく設備が整うまで、〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ（太陽学）〉や他の科学的実験を行うことができない。この部屋の窓には、厚さ約一インチのかなり大きな色ガラスが設置される。その後、建物全体に金、銀、銅製の厚薄織り交ぜた金属線を張り廻らせる予定である。早期に色ガラスが手に入り、この建設が軌道に乗ることを期待している。

或る〈科学〉、科学界の頂点に君臨するその科学を獲得したならば、その人はあらゆる苦悩から解放され、生来の自身の資質さえ克服或いは変革することができ、更には清浄位に至ることができる。インド秘奥の資産でありながら、この国から滅び去ろうとしているこの宝。ヨギたちはこの真理到達の証（あか）しを再び灰燼に帰すことを望まない。彼らは、途轍もない痛みを伴う幾年にも亘る靈的修行、人生を賭けた苛酷な靈的生活を営み、この真理を実証してきた。それゆえ、卓越した魂の中にその宝を秘藏し、世界の福利のためにこの叡智を用いたいというの

が、彼らの最奥の願いなのである。この科学の射程は限りなく広い。

否、無限だと言っても過言ではない。

ババジ(師父)はかく語られた、「かくも聖なる力は、ヨーガ文献には記述がない。パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』の〈ヴィブーティ(顯現)〉章、『シヴァ・プラーナ』のような古代の聖典、タントラ系の經典、或いは仏教やジャイナ教のヨーガ関連文献、スーフィやキリスト教の偉大なヨーギたちの聖書、いずれの文献にも、〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ(太陽智)〉のような智識への言及はない」と。

〈ジュニヤーナ(理論智)〉と〈ヴィジュニヤーナ(実践智)〉
師父が〈科学〉という言葉で意味するものは、私(カヴィラジ)宛の書簡の引用から理解されよう。

「息子よ、すべては〈彼女〉の望みなのだ。この神的望みの恵みがなければ、何事も理解できない。何故人間の魂は至高の真理に至ることができたのか？ 知識を膨大に吸収し、真の実在に至る道、マーヤーの甘美なる誘惑を免れる道を発見し、今も探求しているからだ。この知識は二種の〈智識〉として知られる。即ち、〈ジュニヤーナ(理論智)〉と〈ヴィジュニヤーナ(実践智)〉であり、この〈智識〉により、魂は三重苦から解放される。例えば、彼は誰なのか、或いは誰により創造と破壊

は起こるのか、何故彼はかく振る舞うのか、といった疑問に答えるのが〈ジュニヤーナ〉、一方、創造と破壊を支配し、空間を超越する〈至高の力〉、その力を生み出す者、こういった問題に応えるのが〈ヴィジュニヤーナ〉だ。世界は虚偽、〈彼〉のみが真実だ」。

又、「息子よ、人が知覚するのは〈マハーシャクティ(至高の力)〉の活動だ。総じて、人の思念は様々な道に迷い彷徨する。暗黒力に促され、自ら昏迷に陥るのだ。その感覚で〈至高の力〉を知ることはできない。その究極の絶頂は、〈マハーカーシャ(大虚空)〉を超えた〈至高の力〉の中にのみ存する。現在、この偉大な科学を知る者は皆無だが、〈至高の力〉の恩寵により、いずれ花開くだろう。

人が自らの魂の中に清浄性を保持することができれば、その人の過去のあらゆる罪過、苦悩、苦悶、愛着、激情の束は、すべての存在を統べる〈マハーマーヤー〉を超越する叡智の光によって消滅する。その時、〈至高の力〉の光明と叡智の光は燃え上がり、心に巢食った無明と暗黒は尽く一掃される。ヨーガと科学なくして何ものも成就することはあり得ないのである」。

科学と知識

これらの師父の書簡より、科学は知識に勝る、ということが了得できる。知識の精髓が科学なのだ。普通のやり方で事物の本質を知ることは知識、その広大な全領域に習熟することにより根底から知悉することが科学なのである。知識の功により〈トゥリーヤ(第四段階の祝福位)〉に至ることもできる。が、それ以上の境地、即ち〈至高の力〉の至福を超えて、全ての原理を超えた究極原理に至るには、科学以外の道はないのである。

〈ジュニヤーニ(智者)〉の精神でさえ、〈バガヴァティ・マハーマーヤー〉のマーヤー(幻影)の輪に巻き込まれ、執着の大波に溺れる可能性がある。だが、知識が科学に転じた時、〈至高の力〉の憩いの翼が信徒を慰め、魂に純粹な力と清澄な至福をもたらし、もはや退転はない。嬰児が自ら這って行って母親の手を握った時は転落の恐れがある。その信も力も弱いからだ。だが、母親自ら手を差し伸べ、嬰児の手を握る場合、転落の恐れはない。知識と科学の関係も、この嬰児と母親の比喩のように理解すべきだ。科学の明澄な光の中では、知識も無知も共にその光を失う。二元と不二、永遠と瞬間、運動と停止といった対立項を等しく達成できるのは、科学が唯一の解答なのである。

この力は、初めにして終わり

ここで、ババジ(師父)の他の書簡から少し引用したい。

「息子よ、全ての力の根源なる力は、初めにして終わりである。その意味では〈彼〉以外にいかなる存在もない。〈彼〉が自らの力を収縮すれば、万物、月も太陽も星々も世界も、全ての神々さえも、その存在を止め、姿を消してしまうだろう。ただ〈彼女〉、至高の安楽、究極実在の本質のみが、二元と不二、永遠と瞬間、快楽と苦痛、叫びと苦悶、父と息子、主人と召使といった至妙の業を為すだけだ。彼女自身以外にその目的を知る者はいない。個人の魂、本質の魂、至高の魂、或いは粗雑な魂、偽りの魂、全てが〈母なる至高の力〉の働きなのだ。この事実の他に真実はない。無意味な論理や議論は無駄だ。眼前の事実を前に何を議論するというのか？ 常に心底にこの〈母〉を懐き、外的情動に流されることなく、絶えず〈母〉に触れようと努めるのだ。さらば、万事意の如く適(かな)うだろう」。

大宇宙と小宇宙たる身体の相似

太陽の原理は、知識と科学両者に密接な関係がある。ヨーガの聖典には、太陽に集中することにより地球と万物の知識が開示される、とある。太陽は万物の産み親であり、根源であり、原理である。太陽は、いかな

る時、いかなる処、覚醒・夢中を問わず、唯一の光の付与者なのである。太陽から照射される光の炎は宇宙に遍満する。もし光が一方向に限定或いは制限されたならば、忽ちにして全世界は、智から隔絶されてしまう。いわゆる智識の類はすべて消滅する。あらゆる智識の目覚めは太陽光の放射によるものなのである。この制御された光線、この稠密な光が上昇を続ける時、究極の摂理が〈プラナーヴア(第四段階、究極の超越的境地、至福、原初の聖音オームに表象)〉の恵みにより、光の中に姿を顯わし始める。同時に、賢明な〈クンダリニー〉も、この原初聖音と共に〈プラフマ〉の道を各領域を貫きながら移動し始める。この大宇宙で起こっていることと同じことが、小宇宙たる身体でも起こっているのである。かくして、太陽の力により、太陽と月の調和が招来され、結果的に〈スシュムナー〉との融合が起こるのである。

《世界の創造は言葉に発し、破壊も同じく言葉の支配下にあり》

タントラの〈マートリカ〉原理と〈ヴァルナ〉原理(音節論)を深く探求すれば、〈スーリヤ・ヴィジュニヤーナ(太陽智)〉と同等の神祕が内包されていることに気づくだろう。「創造、保持、破壊」の世界の展開においては、〈マートリカ・マンダル(音節力)〉が働いている、とタントラ文献にある。〈サットアドヴァー〉論(タントラで六つの道とし

て示される。一方に〈パダ〉 〈マントラ〉 〈ヴァルナ〉 があり、他方に 〈プーヴァン〉 〈タットヴァ〉 〈カラー〉 が存在する。沈思すれば、〈ヴァルナ〉 と 〈カラー〉 は分かち難く一体なることが分かる。〈シヴァ〉 と 〈シャクティ〉 の如く、言葉と意味は分かち難く、実際文字は 〈ナーダ〉 の 〈ラシュミ・チャクラ〉 に 〈ビンドウ〉 を配したもの(至高力を持つ原初音の聖なる輪)に他ならない。

〈ヒラニヤガルバ〉 或いは 〈サヴィター〉 、即ち 〈シャブダ・ブラフマ〉 が中心を占め、内には 〈ヴィヨム(虚空)〉 が中央に位置する。四十九文字は一体として統合されており、外気の四十九の振動に従い、光線の形で発出する。これらの文字は 〈ムーラーダール〉 から 〈アージュニヤーナ〉 までの六チャクラで光輝を発する。各文字は、a に始まり ri で終わるアルファベット或いは 〈アクシャマーラー(聖句の花環)〉 の形で、五十の花弁として輝くのである。これらの聖句或いは 〈ナーダ(音)〉 則を保持できなければ、〈ブラフマ・ヴィディヤ(絶対真理の智慧)〉 の権威とは言えない。

《世界の創造は言葉に発し、崩壊も同じく言葉の支配下にあり》。
創造や崩壊さえ超越して、収縮と拡張の頂点において、〈ブラフマ(絶対真理)〉 の至高点に至ることを欲するならば、聖句による言葉の力が必要だ。神や神的なるものの身体の本質とは、この聖句の光なのである。

〈ヤントラ(タントラで用いる幾何学的金属片)〉の構造も同様だ。〈シユッダ・ヴィディヤ(聖句の清浄なる道)〉による自己修養を通して、〈マントレシュヴァル〉或いは〈マントラマヘシュヴァル〉の境地に至れば、すべての文字の上に君臨することになる。これは、あらゆる聖句と神性を自己の統治下に置くことを意味する。そして、真のグルたる〈サダーシヴァヴァスター(シヴァ神の永遠相)〉に至るのである。

原初音たる〈ブラナーヴァ〉の秘奥を知る者は、『ヴェーダ』」の中でも〈ナーダ(音)〉と〈ビンドゥ(点)〉の靈的修行として時処位に応じて様々な道が示されていることに気づくだろう。キリスト教の観点、古代中世の西欧ヨーガ論、スーフィズム(イスラム神秘主義)の視点、その他多彩な地域の内的修行システム等を調べてみても、この同じ科学が至る処に記載されていることを指摘できる。ただ未熟な修行者が、この叡智を誤解しているのに過ぎないのである。

自然界のあらゆる活動は色彩の展開

自然界のあらゆる活動は、色彩の展開である。無執着の観照者ならば、〈真理〉の白い聖句の上に、青色と赤色に彩られた聖句の活動とその反応が常に進行しているのを如実に観ることができる。世界は水泡の如く一個の天網として現れ、無知なる者の眼には、この天網と幻影が真実に

見えるのである。眼に映じる音節に情念が存在し、幻影が現実の如く存在する限り、虚偽は払拭され得ない。この聖なる地で独自で夢のような幻影を演じる〈彼〉を真に知らなければ、その罠に絡め捕られ、この幻惑の映像に執着してしまうのである。この幻惑の世界の中での驚くべき統一を見出すには、心的修養と探求心が必要なのである。刺激的で色彩に満ち、我々の内なる鏡を蔽う文字の大海上を離れ去り、我々は内なる清浄を更に浄化しなければならない。心自体が清浄であれば、全能なるこの世界の主に容易に至り得、その主の活動の跡を辿る事さえできるのである。

科学の目標

科学の目標は、この途方もない幻想の世界の根源的法則を発見することである。世界のあらゆる活動は、文字の花環の融合と分離によって構成される。科学者は、媒質の本質を探究し、現前の現象を洞察することにより、全能者の業(わざ)と巧みを直接辿ることができるのである。靈的進化における〈ヴィシュヴァカルマ〉による世界の創造、〈バーシュマースル〉による膨大な新規宇宙の創造は、その顕著な例である。

科学の入門は太陽光

読書を進めるためには、先ずアルファベットを学ぶことが必要だ。かくて初めて言葉の組成を学ぶことができる。同様に、科学を学ぶ上での最初の入門は、清浄な太陽光線から始まる。もし、太陽光を分析することにより、清浄な文字や聖句を自分のものにできたならば、異なった光線の相互の関係や過程も理解できる。聖句に関しては『アドヴァイタ・ヴェーダンタ』等に、相互の関係や過程に関しては『ウパニシャド』等に記述がある。しかし、経験を積み熟練した科学者でなければ。その真意は分からぬ。

その豊かな果実も彼の前では無に等しい

私は、太陽の科学に関して、労せずして多くの貴重な実証を目撃してきた。長くは語るまい。ただ、その果実は無限だと言っても過言ではない。

だが、その実り豊かな果実さえ、師父の存在を前にしては空しく無に等しい。今日も彼は、豊かな靈的財宝と共に、更に向上の一途を辿っている——神性さえ塵芥の如く見做して。師父は、私にとって神の愛の表象であり、常にわが目標である。永遠に彼の存在を銘記し、忘却の淵から救い給え。彼の恵みと我等に示された力によって、我等を今日も導き給え。その方は、私を虚偽から真実へ、無知の世界から智慧の世界へ、

死から永遠の王国へと導いて下さった。本書は、その方の御足の下に捧
げる慎ましくも衷心からのわが祈りなのである。

第二章

ジュニヤーナガンジャの神秘

様々な聖地

私はここで〈ジュニヤーナガンジャ〉の本質に関して、可能な限り光を投げかけようと思う。〈ジュニヤーナガンジャ〉が、身体と行為の本質と密接な関係を有するからである。〈ジュニヤーナガンジャ〉の神秘を探究して初めてこの問題に関する真実を解明することが可能となるのである。

この世界には、様々な聖地が存在する。我々は様々な文献の中に、その示唆を見出す。偉大な聖者たちの中には、生前に直接その地に赴く経験を果した方もいる。〈ジュニヤーナガンジャ〉——我々のこの地上に存在するが、ひと際秘められているため、道力が極めて卓越し、その地の主の許可を得ない限り、この肉身を以て見(まみ)えることは難い。特別な〈シッダブーミ(覚者の地)〉の顯現であり、聖なる地である。聖なる地は自ら光輝を発するが、求める魂がこの秘められた地への道なき道を発見することは、他ならぬその聖地から力を賦与されない限り不可能だ、と言っても過言ではない。

その志向、条件、そして異なる修行、異なる目的を達成するために、異なる聖なる地が建立された。その意味では、〈シッダブーミ〉、〈ディヴィヤブーミ〉の如き不死なる者が居住する聖地を一カテゴリーに纏めることができる。だが、聖地と雖も、各々がそれぞれに異なり、独自の特徴を有している。例えば、〈ゴロクダム〉、〈ニティヤ・ヴリンダヴァン〉、〈カイラシュ〉、〈ニティヤ・サケト〉といった重要な聖地には各々異なった性格がある。

これら特別な地は、各々異なった目的に従って建立されたもので、この〈マーヤー〉の世界には多数存在する。だが、同時に〈マーヤー〉を超越していることも事実である。例えば、〈ケダーレシュワル〉、〈ジヤルペシュワル〉、〈マハーカール〉、〈シュリシャイラ〉、これらの聖地はすべて火の原理によって建立されている。同様に、〈カンカール〉、〈クルクシェトラ〉或いは〈ガヤ〉といった聖地は、風の原理に則っている。また〈アヴィムクタ〉、〈ゴカルナ〉といった地は、空の原理に則っているのである。

迷妄の〈マーヤー〉を超越し、清浄の王国に建立された聖地も数多く存在する。仏典によれば、各々の仏陀には異なった〈ダートウ(特性)〉により、独自の〈ブッダ・クシェートラ(仏国土)〉と聖なる地があるとされる。これらの地を基に本源の地を明らかにすることは、さほど困難

なことではない。かくて、かの〈ヴリンダヴァン〉や〈二ティヤ・ヴリンダヴァン〉を手がかりに、この世界に存在する〈カシ〉を経て、〈シヤンカル〉の三叉に位置するあの黄金の〈二ティヤ(永遠)・カシ〉に至ることも可能だ。至る処に相互に結ばれたヨーガの聖なる糸が存在しているのである。

〈ジュニヤーナガンジャ〉の特質

さて、ジュニヤーナガンジャを論じるに当たり、この地が通常の地理上の土地ではないことに留意する必要がある。確かに地理上の地平の彼方に秘かに存在はするのだが、その本質は遙かに紗々たるもので、天成のヨーギでなければ、近寄ることさえできない。同処に参入することは、更に至難を極める。だが、一介の修行者でも、かの地の聖仙たちの恵みを得れば、同地に至ることができる。ジュニヤーナガンジャは、地理的にはカイラシュの背後に位置するが、一般の旅行者の眼からは隔絶されている。

ジュニヤーナガンジャ、ラジラジエシュワリ精舎、偉大なるグル・マハタパ大師の僧院は、各々異なったレベルに応じて建立されている。ジュニヤーナガンジャのみが初級レベルに応じ、ラジラジエシュワリ精舎は中級レベルに、偉大なるグル・マハタパ大師の僧院は最上級に当たる。

当処は、世界の創造者がこの世界を創造した当初は存在しなかつたが、偉大なるヨーギたちにより建立されたものである。

〈ドゥルヴァロカ〉は、或るヨーギの靈的修行の結果として建立され、〈ゴーロカ〉は、シュリ・クリシュナの王国の永遠の至聖処として顯われ、〈スダーワティ〉は〈アミタブ・ブッダ(阿弥陀仏)〉の清淨力により、抽象元素上に建てられた。同様に、〈ジュニヤーナガンジャ〉は、或るヨーギにより、世界の至福という至高の目標を達成するために、偉大なるヨーガの実修処として建立され、常在の施設にも拘わらず、非時のヨーガ道場として機能している。

ヨーギと苦行者のカルマの違い

このことは〈ブラフマ〉の創造と密接に関係している。この関係とは、その〈身体=行為〉原理に関する形而上の議論を含む。ここで私はこの課題に関して簡単に論じておきたい。カルマ(行為)は、千差万別の差異があるが、かかる一般のカルマは論じるに値しない。ここで論じるのは、苦行者とヨーギの行為に関してである。苦行者たり得ぬ者は当然ヨーギたりえぬ者であり、論外である。死生を超えて行くこと、これが苦行者の目標だ。仏典にいう〈シュラーヴァカ(声聞)〉が、ここでいう苦行者に当たるかもしれない。苦行者は智慧に至る。そしてその智慧の炎の中

で、不浄の煩惱を焼き尽くし、マーサーの創造の根本種子に光を点ずることができる。竟には、生死を超えた〈カイヴァリヤ〉という境地に到達する。この状態に到達すれば、苦行者はもはや転落しないが、この状態を超えて、神への道を更に前進することも適わないのだ。苦行者の目標が元来卑賤なので、その基盤も乏しく、師の無限の力を受容できないのである。師は、その弟子の志や機根に応じて、その教えを授けるのだから。

私が今述べた智慧は、専らクンダリニーの目覚めに関連している。サッドグル(正師)が弟子の修行者にその力を賦与すれば、弟子のクンダリニーは目覚めた後、上昇することが可能となる。苦行者の内なる智の力に巢食っていた不浄の煩惱は、グルの恵みによるクンダリニーの目覚めと共に、一掃されてしまう。その結果、苦行者の内なる魂は、浄化を経て〈至高の力〉の本然の姿に転ずる。この転変は次第に起こり、苦行者の靈的入門後、真摯な修行によりそのクンダリニーの力も拡大し、徐々に自らの全身、感覚、意識等に永遠性が浸透していくのである。

不浄の煩惱を払拭するのは〈チッドシャクティ(意識の力)〉の働きである。その間、求められる対象は、苦行者の修行の深化と共に、益々その姿が鮮明となっていくが、苦行者自身には届かない。何故なら、不浄の煩惱が一毫でも残っていれば、無垢の目標には至らないからだ。一方、

不淨がある程度まで残らない限り、肉体や感覚としての自己存在を保てないということも事実だ。この浄化の過程が完成すれば、不淨の煩惱は行き場を失い、結果的に何ものも残存しなくなる。その時、観念なき智慧が誕生し、構造と身体は忽ちに脱落する。智慧が目覚めれば、不淨の煩惱は消え去り、苦行者は靈的師或いは祈りの対象と共に自己自身を達成する。即ち、自身の目標の達成であり、自己実現である。

苦行者は、グルの恵みと共に自らの精進により、究極の智慧を達成し、清浄を得て〈チッダーカーシャ(意識の聖なる虚空)〉の境地に至る。この段階では、清浄意識のみとなり、もはや魂に渴望はない。だが、苦行者がその人生に於いて肉体ある間にその靈的実修を成就できなければ、〈チッダーカーシャ〉はその死後にも実現しない。その苦行者は残された未達の義務を果たせないのである。現在の肉体を離れた後、苦行者はその座位の欠如ゆえに活動を止めざるを得ず、魂の進化は完全に遮断されてしまう。肉体の存在に可能な範囲の進化状態に受動的に留まらざるを得ないのである。

ヨーギの靈的進化は、苦行者のそれとは異なる

ヨーギの靈的進化は、苦行者のそれとは異なる。誕生時よりヨーギの土台はほぼ清浄である。〈サッドグル(正師)〉が入門時よりヨーガの精

體を伝与するからだ。その結果、賦与された力は強靭化され、魂の進化の過程も自ずから異なる。土台が未熟ならば、その獲得する力も弱い。ヨーギの力は、量的に巨大なるのみならず、質的にも全く異なる。その功により煩惱の影は一掃され、この力はヨーギの永遠の友となるのである。

苦行者の場合、神の恩寵により、好ましからざる力は放棄することにより無化されるが、ヨーギの場合、好ましからざる力は好ましい力に転換される。その際、この好ましい力は、ヨーギ自身の力として顯われる。苦行者は、その靈的修行の最後に、純粹意識という無相の境地に至る。一方、ヨーギは、〈ヨーガ・クリヤー〉の恵みにより、清浄相に至る。ヨーギは無相や無身といった状態には留まらないのである。

ヨーギのクンダリニーの目覚めは、苦行者のクンダリニーの目覚めとは大いに異なる。苦行者は、師からの賦与と自らの精進により得た力を更に増大させ。竟には、その力を元手に意識の炎により煩惱と塵埃は次第に焼却され、その極みには煩惱の消滅と共に靈的修行も終わりを告げる。苦行者は自らの求める像との一体化を果たすのである。これが苦行者のシッディであり、〈ヴィティー(無身)〉の境地である。かくして、〈ヴァーサナー・ニヴィリッティ(無欲)〉が成就し、その結果 〈デハー・パート(肉体の靈化)〉が実現するのである。

ヨーギの場合、自らの行為と至高意識の力ゆえに、後の段階で神像を創造する必要はない。ヨーギはより高次の力に恵まれ、入門の段階で至高意識に到達し、師の器となる。師の役割とは、〈チット(至高意識)〉の力により神像を創造することではなく、賦与された心像の力を用いて浄化を促進し、不浄の煩惱を善き力に転ずることである。その時、ヨーギは、力の権化ともいべきこの至高像が自分自身とは別者ではないことを悟る。だが、ヨーギはこの境地をも超えていく。即ち、ヨーギは超越者であり、この状態の観照者と同時に支配者にもなる。この像は、至高の力である〈ヴィシュワジャナニ(母なる宇宙)〉という特定の像として顕現するのである。

苦行者は利己的だが、ヨーギは利他的である。苦行者の目標は、自分自身の苦惱からの脱却だが、ヨーギの目標は、苦惱から単に自身を解放することだけではない。ヨーギは利他に献身し、自己の救済のみならず、すべての生類の解脱への道を求める。「ヨーギならずして師になること能わず」とはその謂(いい)である。

ヨーギの三類

苦行者とヨーギの本質及び行為の差異について簡明に述べたが、すべてのヨーギが同じであるとは限らない。ヨーギに共通する特徴があるの

は当然だが、その目指す目標の比重等に差異があるのも事実だ。そのヴィジョンによって、ヨーギは二種に分類される。即ち、断片型と統合型だ。断片型ヨーギは、更に断片型と永遠型に分けることができる。この三種のヨーギ分類、断片型、統合型、永遠型の性格論も主要論題と言える。

断片型ヨーギは、〈チッダーカーシャ〉を超越したある特定の高次存在を選択することによりヨーガの道を歩む。だが、精進の完成として意識の無条件の聖なる虚空という究極の目標を更に超えていく事が出来なければ、このヨーギの名を冠することはできない。この境地は至高の境地であり、〈パラメシュヴァラ・タットヴァ(究極原理)〉は他ならぬこの土台の上に打ち立てられる。〈カーンダ・ヨーガ〉の目標を目指して為される行為と精進により、この土台は完成される。これに関連して、〈マハーカーンダ・ヨーガ(至高ヨーガ)〉、〈アカーンダ・ヨーガ(統合ヨーガ)〉についても論じるつもりだが、今は〈カーンダ・ヨーガ〉の神秘について論じたい。

〈ヨーガ・ディークシャ(ヨーガの靈的参入)〉が為されぬ限り、〈カーンダ・ヨーガ〉の目標でもある〈ヨーガ・ブーミ(ヨーガの基盤)〉は達成されない。靈的参入によりこの基盤を成就する種子が魂の中に根付くが、この種子に栄養を与え、蕾を花や果実、成木に育てるのは、偏に

ヨーガの実修に掛かっている。ヨーギが精進せず、実修に無関心であれば、師に示された目標を達成することはあり得ない。靈的入門の期間に、グルは恵み或いは慈悲の力を弟子に賦与するが、この力は弟子自身の意志の力や行為の滋養となる。この行為は恵みに左右されることは事実だが、あくまで恵みは恵み、行為は行為である。行為の本質は決して恵みのみには還元できない。カーンダ・ヨーギが靈的参入時にその師から恵みを受けながら、自身の過失によりその義務を果たせないならば。それは悲劇だ。師より目標を明確に示され、同様にその目標を達成する力も与えられていながら、そのヨーギが目標を達成できなければ、その科(とが)は偏に弟子の怠慢にあることは明らかだ。

限られた人生の中で義務を果たすことが肝要だ

人生は短い。限られた時間の中で義務を果たすことが肝要だ。このからそめの身体を離れては、肉体を要する我々の行為を成就することは不可能になる。行為する身体との関係が断ち切られ、ヨーガの道を前進することができなくなるからだ。**この血肉を伴う肉体が生存している間に、行為を成就させる必要がある。** さもなければ、目標を達成するという希望は夢と潰える。肉体ある間にすべてを成就すれば、行為は忽ちにして息(や)む。成し遂げることができなければ、生の流れによって源泉に至

ったとしても何の意味もない。蓮華の〈ビンドゥ〉或いは花弁に住する力を得ることは難いのである。

〈アーサナ〉或いは靈的座位

〈ヨーガ・ディークシャ(ヨーガ参入)〉後、師は弟子に、〈アーサナ〉即ち適切な靈的座位を与える。この座位の賦与は神秘的な現象である。靈的座位を与えるとは、絶えざる行為の中に留まる機会を与えることを意味する。

ここで想起すべきは、プージャ儀式における尊崇の対象たるすべての神々は、ヨーギの靈的境位を象徴的に示している、ということだ。ヨーギが〈アーサナ(靈的座位)〉に坐する時、その座位がこの死すべき肉体の他ならぬ土台になる。この死すべき肉体を離れた後も、ヨーギはグルから指示された行作を継続しなければならない。それゆえ、この境位は〈グルダーマ〉即ち「グルの住まい」と呼ばれる。この境位は、ヨーギが行為を完遂することにより消滅する。

ここでも、苦行者とヨーギには差異がある。苦行者は自身の死すべき身体の中の蓮華の花弁の中に入ることができるが、ヨーギはこの花弁から滴る甘露を味わうことができる。両者はヨーギの異なった二つのレベル、〈カーンダ・ヨーギ〉と〈マハーカーンダ・ヨーギ〉或いは〈アカ

ーンダ・ヨーギ〉、即ち未達のヨーギと達成のヨーギに喩えられるかもしえない。達成したヨーギは、〈母なる大自然〉の栄光に至る。未達のヨーギも、〈母なる大自然〉の現前を看得するが、その境地に執着してしまう。

〈母なる大自然〉の座位は、すべての蓮華花弁にある。そして、根基神経から上昇に向かう呼吸の旅路と共に、〈チャーヤー〉、〈アヌチャーヤー〉、〈ブラティチャーヤー〉という三段階を経て、上昇に向かうのである。だが、未達のヨーギはそのすべてのレベルに達する訳ではない。せいぜい一つか二つかの〈母なる大自然〉の〈チャーヤー〉に達するに過ぎない。

〈ジュニヤーナガンジャ〉は靈的神人たちの王国

ジュニヤーナガンジャの〈ヨーガ・ドリシュティ(ヨーガ教程)〉によれば、先ず三つのヨーガ領域があることが分かる。第一は〈グルダーマ〉即ち「グルの住まい」と呼ばれている。第二は〈ジュニヤーナガンジャ〉のヨーガ領域である。第三は〈ヴィスヴァ・グル〉即ち普遍導師であり、その領域はこの広大な世界そのものである。

〈マハージュニヤーナ(至高智)〉を得んがため、苦行者もヨーギも、これら三領域全体に達するために、すべてのヨーガ教程を履行する必要

がある。これら三領域は〈カルマ(行為)〉の土台であり、時の制約を受けない。〈アヌグラハ(恩寵)〉は、すべてに与えられており、この恵みはヨーガの過程においても重要な役割を果たす。〈ジュニヤーナガンジヤ〉は靈的神人たちの王国なのである。

第三章

身体と行為、ジュニヤーナガンジャの本質

身体なくして行為も歡樂もあり得ない

わが師父はよく説かれた、「身体は正しい行為のためにある。決して愛着や悲しみに任せてはならない」と。然り、神は自らの似姿として人間を創り給うた。行為が身体を形成することが真実であるのと同様、身体はただ行為のためにのみ存在するということも真実だ。身体なくして行為も歡樂もあり得ない。人は、その人自身の〈ブラーラブダ・カルマ〉即ち「蓄積された行為」(或いは「蓄積された意識」、仏教のアラヤ識とは異なる)を履行するために、身体を獲得する。その行為が完遂されるまでは、身体は必須である。この行為とは〈ボーガ〉、良くも悪くもそれまでの行為の果実を刈取る、ということだ。一旦すべての果実を味わったならば、身体の要は減少する。

行為する身体を〈カルマデハ〉、行為の果実を味わう身体を〈ボーガデハ〉、行為しかつ味わう身体を〈ミスラデハ〉と呼ぶ。即ち、各々行為する身体、味わい苦しむ身体、行為と果実の混在した身体である。カースト、寿命、歡樂、この三者は前世から蓄積された行為の果実であ

る。カーストや誕生は身体に関連しており、死とは他ならぬこの関連が断ち切られることなのである。

人間の身体の尊貴性

宗教詩人ラーマブラサードが、いみじくもその歌の中で、人間の身体の尊貴性について歌ったように、「わが愛(いと)しき魂よ、お前はこの人間の身体を養育することで富を得たとしても、〈耕作〉ということを知らない」のである。ここで〈耕作〉とは、行為のことである。人は、肉体ある間に為すべきすべての行為を完遂しなければならない。かくも人間の身体は貴重なものなのだ。造化の天則により、個人の魂が最終的に人身を得るためには、八百四十万もの生を経なければならぬ。人身を得て初めて行為することができる。行為することができて初めて靈的旅程を前に進めることができるのである。

《誕生は子宮から》。人体は子宮、胎盤から発する。人間としての誕生は最勝の誕生である。人身が最勝の身体なのである。意識と無意識といった対立項の葛藤は人身のみで発生する。男女両性の結合から、すべてが始まるのである。人間の成長という進化の前に、すべての進化が造化の靈的配剤により準備されているのである。

死は瑣末事に過ぎない

ここで私は頗る深遠な神秘について述べておきたい。もし人が生前にその基盤に到達する、即ち三つの靈的座位を満たす行為を完遂したならば、全宇宙は、解放に向けてその真面目（しんめんぽく）を開示するだろう。我々が「死」と呼ぶ事象は不可避ではあるが、瑣末事に過ぎない。

〈ジュニヤーナガンジャ〉の神秘に関して、今後とも私の経験したことをくまなく開示していきたい。開示に当たり、わが知見に基づき、その内在的価値の発揮を優先するつもりだ。この現象界でその神秘や秘密をすべて公開することは不可能だ。だが、あの王国に住する靈的神人たちの恵みにより、真理はヨーギの内から開示されることが可能になったのである。

苦行者の修行の終わる処に、ヨーギの修行は始まる

基盤が弱ければ、クンダリニーの目覚めも弱い。靈的修行者は、その師の恵みを得て、自身の智慧の炎を燃え立たせ、全人類に及ぶ至高の智慧へと昇華させる。苦行者の修行の終わる処に、ヨーギの修行は始まる。初心の修行の当初より、苦行者とヨーギの行為には明確な差異があるのだ。ヨーギは、不斷にその身体を成就し、死を克服しなければなら

ない。今我々が論じてきたのは、至高意識に到達するための意識体のことである。

現況の個人の魂を見ると、人生に於いて三つの重要な範疇がある。即ち、〈アートマン〉、〈カラナヴァルガ〉、そして〈粗大な身体〉である。〈カルマ〉は行為によってのみ削減される。だが、〈偉大なる身体〉に至ることがなければ、それまでのすべての精進力の功は灰燼に帰してしまう。全き解放は起こらないのである。この〈クリヤー〉において、靈的神人の力が至高さそれるのである。

第四章

ジュニヤーナガンジャからの十の書簡

ここに挙げる十の書簡は、わが靈的尊師の許可を得て掲載するものである。但し、各書簡の梗概のみを記す。

第一書簡

主ヴィシュワナートに祈る、内なる光生じ、汝の十全なる成就が果たされんことを。永遠の至福を得なければならない。あらゆる人間の情感を超えた真の情感がある。自己探求こそ究極の探求であり、人生のあらゆる葛藤を一掃する。純粹意識は、意識・無意識を問わず、次第に開頭していく。ヨーギは、自身の洞穴とオアシスを持たなければならない。
そこでのみ、静穏に安居し、全人類のための至福を味わうことができる
のである。

第二書簡

前書でヨーギの洞穴とオアシスについて触れた。そこは実にヨーギの魂が慰安と法悦に浸れる最奥の魂のことだ。他にここに勝る処はない。ヨーギは、この洞穴中に独座しながら、超越と無限の実践を行う。オアシスも同様である。群衆と混沌のただ中にあっても、自らの最奥の魂の中に外音を遮断したオアシスのような静安処を創ることにより自らの静謐を保つことができる。ある。

第三書簡

ムニは、行として沈黙を守る。ヨーギにとっても沈黙の行は必須だ。靈的修行において、真理と沈黙の意義は重要であり、至高のものだ。ゆえに、ムニや沙門は絶えざる沈黙の行を守る。その偉大なる沈黙の中で、眩き閃光を眼にする。この閃光がジュニヤーナガンジャへの道を示してくれる。

第四書簡

ジュニヤーナガンジャは、様々なやり方で示すことができる。この地は、存在論的かつ物理的に認識できる。可視、不可視を問わず、現実にチベット近郊のヒマラヤ渓谷の地に、この地を感得し、認識することができる。人身を纏い、真理に到達したヨーギたちが安らう処、それがジュニヤーナガンジャだ。ヨーギたちは、魂の解脱に至る至高の智慧を得るために、あらゆる苦修練行に精進してきたが、今も、時を超えて、ここに存在している。彼らは、人類に道を示し、現在も冥々裡にその超越への旅を続けているのである。

第五書簡

ヴィシュッダーナンダは全てを知り、理解している。靈的師の恵みにより、汝はすべてを所有し、いかなる欠如も不安も感じない。汝はほとんどの弟子たちを信頼していない。彼らは、安楽にいながら苦行を積んでいると感じ、卑小な果実に満足している。私は為すべきことを為さね

ばならない。ブリグラム門下の誰もが、初めもなく、中間もなく、終わりもないことを知っている。この世界に驚異ならざるものはない。殊更平安を求める必要などないのだ。

第六書簡

汝は私のことをよく知っている。私も汝の弟子たちの問題点をよく知っている。そこで、弟子たちを試験するために、一人の修行者を送ることにした。汝は良き果実を得た。無論、物質的な意味ではなく、霊的な意味である。その精進により、永遠の恵みさえいはずれ受けるだろう。数日中には、その果実を味わうことになる。アシュラム経営に尽力するのだ。現在は、弟子たちにいかなる課題も与えてもいけない。未だ時至らず。その時が来れば、こちらから指示する。正しい行為を為せば、〈ムリトウンジャヤ(死に勝つ者)〉にもなるだろう。

第七書簡

人間の考える能力は、すべての生類の中で抜きん出ている。人々は、自身の利己的動機を満たすかどうかという観点から、ある経典を信じ、他の経典には興味を示さない。その結果、人々を自然への不信と苦悩へと導くことになる。汝と弟子たちは、そのすべてを洞察しなければならない。私は、彼らすべての性向を記すこともできる。汝がわが奴隸たる如く、我也汝の奴隸たらん。私は新道場を幾度か訪ねた。そこに安寧がなければ、特別な修行を授けたいと思う。

第八書簡

友よ、この世界は大いなる恐怖と大いなる苦悩に満ち満ちている。〈マハーシャクティ〉、偉大なる至高の力は、常に我々と共にある。彼女は至高意識の権化。彼はヨーギの中のヨーギ。彼のみがヨーガの本質を知悉している。彼が如何に教えようと、聴く者は間違いなく解脱を得る。汝は、真理を解明し、著述し、公刊するという本来の仕事を果たすがよい。道場で起こっていることに、常に眼を開き、注意を怠るな。

第九書簡

(ヨーギ・ウマーナナンダ・スワミからヨーギ・ヴィシュッダーナンダへ)

この世界は様々な意味において、実在であり、非実在である。ただ、ヨーギのみが真実を知っている。

(スワミ・ヴィシュッダーナンダ)

ヨーガの力と共に神の上に観想を凝らしたならば、奇蹟が起こることはよく知られている。ヨーガを通してのみ、神は顕現する。神が御自ら顕現することほど、世界と人生にとって素晴らしいことはない。人間の心のただ中に無垢の虚空を持つためには、悔恨と悲嘆を一掃しなければならない。これらすべてを克服すれば、偉大なる歓喜を得ることになる。

第十書簡

恩寵に恵まれれば、歓楽を求める欲望の無謀な力は弱体化する。その時、〈チッタ〉、心の素材は、あらゆる暗黒を一掃し、智慧の太陽が昇

る晴天の虚空が広がる。全く面目を一新した花々が眼前に咲き誇り、途轍もない歓喜に襲われる。我々は歓喜の子供なのだ。我々の〈チッタ〉は〈アーナンダ〉であり、〈サティヤ〉なのだ。我々は真正かつ至福の意識なのである。

第五章

珠玉の聖語——ゴピナート・カヴィラジの日誌より

一九三八年三月十八日

すべての器官はその保護を持つ——眼に対する瞼のように。もし瞼がなければ、眼は外を見ることはできず、自ずから内側へと転じる。同様に、他の感覚の保護を用いれば、自然と内側へと転じることになる。それゆえ、我々は殊更内面に転じるように努力する必要はない。

一九三八年八月十九日

すべての存在の中に空虚を見出すことができるだろうか？見出すことができれば、我々自身の中にも空虚を見出すことができる。あらゆる存在は、無であり、空であり、不可視の原子だからだ。〈ヴィジュニヤ

ーナ・バイラヴァ〉は、五種の空虚について語る。すべての文字は空虚なのである。

一九三八年九月一日

「意識は真実、知覚は自己なり」。カシミール・シヴァ派は、こう語る。知覚を除いて自己といったものはない。では、知覚とは何か？ 意識に関する知覚のことだ。では、誰が意識を感じるのか？ 意識それ自身が意識を知覚するのである。では、私は？ 私は、死後さえもこの永遠の知覚の観照者なのだ。究極的には、この観照者は、あの偉大なる知覚の一部になる。我々は、シヴァに帰入し、シヴァになるのである。

一九三九年一月一日

〈ビンドウ（点）〉は線よりも重要だ。我々は線を見る時、点は見ない。点は力、線は創造。〈ビンドウ〉を除き、創られたものは腐敗し、死に

属するものだ。我々は、この〈ビンドゥ〉に至ることにより、〈ビンドゥ〉の背後にあるものに至ることができるるのである。

一九三九年二月十日

修行者やヨーギにとって、暗黒は必要だ。暗黒には、集中、獨一、孤独がある。光を必要とするのは、暗黒の部屋だ。その暗黒の部屋で、光は永遠の点灯を待っている。外界を遮断し瞑目すれば、光は次第にその光芒を増す。瞑目時に顯現する光とは何か？ それは真理の兆しなのである。

一九四一年二月十一日

真理は、二つの存在する像の中間に現れる。最初の像を見る、その後に眼を転じて他の像を見る。そして、再び最初の像に戻る。更に第二の像に移る際に、その途中で止まり、そこに留まる。その中間では、未だ完全には第一の像を捨て切らず、未だ完全には第二の像を保ち得ていな

い。心は内面に向かう。瞼は完全には閉じず、半眼である。これが第三の眼であり、〈プラティバー〉なる永遠の眼である。その時、人は〈デヴァター〉即ち神となる。真理、〈神〉、純粹意識、至高意識が、この唯一の人生の中で、顯現しようと待機している。瞑想し、内面で何が起こっているか、造化がいかに内部に良きものを準備しているか、をよく観ることである。

一九四二年八月十九日

〈ナーダ(音)〉が形象を創る。信じ難いだろうが、実に音が形象を作るのである。あなたの形象も、音によってのみ決定され、促進される。この音の流れが〈ナーダ〉なのだ。形象は〈ナーダ〉の影響により千変万化する。

訳者後記

本書は、Gopinath Kaviraji “JNANAGANJA A space for timeless divinity” Translated from Bengali by Gautam Chatterjee (Indian Mind, Varanasi, 2014) の全訳である。原著はゴピナート・カヴィラジ師の”GYANGANJ(ギャーンガンジュ)”(ベンガル語)、本訳書の原本としたのは、ガウタム・チャテルジーの英訳本である。即ち、本訳書は重訳である。邦訳に際しては、「一法を舍(すて)ず、一法に泥(なづま)ず」(石田梅岩「都鄙問答」)の精神で、最善を尽くしたが、浅学菲才、十全には程遠い。篤学の士は、直接ベンガル語原著を学ばれんことを。

なお、本書中の小見出しが訳者が付けたものであり、原著、英訳書にはない。読書の便を図るためであり、他意はない。本書出版の経緯は、英訳本序文(本訳書「はじめに」)に詳しい。この邦訳も、高岡光氏の依頼によるものである。

原著者、英訳者等に関しては、英訳本裏表紙の紹介文を以て、その紹介の責めを塞ぎたい。

マハマホパディヤヤ・パンディット・ゴピナート・カヴィラジ師は、ヴァラナシ出身の現代における偉大なヨーギ、覚者。また凡常のヨーギとは異なり、その靈的体験を文字化し得た稀有の存在でもあった。

師は、甚大な苦悩と苦痛を経て、その靈的師であるヨーギ・ヴィシュッダーナンダ・パラマハンサの恩寵により、竟に解脱を果たした。師の著述は、タントラ精神に溢れた神的莊嚴さに満ちている。まさに「タントラ」の意味する「聖なる智慧の拡大深化」の革新的表現である。

〈ジュニヤーナガンジャ〉は、古来この地上に現れたすべての偉大なヨーギたちに示され、求められた地である。が、通常の眼には、発見することも認識することも難い。第三の眼或いは神眼を以てすれば、この地の永遠の美を認識することができる。その地は、古代の見者、聖仙、解脱者、至高意識に到達した者たちによって、ヒマラヤ渓谷に建立された。この地は、現実に存在し、あらゆる靈的光明に至ったヨーギたちが、今も肉体を纏って当地で活動していることで知られる。真のヨーギのみが、この神秘の地について語ることができる。そして、それは、パンディット・ゴピナート・カヴィラジ師であり、師がこの地について初めて明らかにした。〈ジュニヤーナガンジャ〉は、本英訳版で初めて世界にその姿を現したのである。

ガウタム・チャテルジー。偉大なパンディット・イシュワル・チャンドラ・ヴィディヤサガルの曾孫であり、詩人にして哲学者。『意識の白い影』の著者であり、アビナヴァグプタの『タントラロカ』全巻を初め

て英訳した。本書は、原著ベンガル語より初めて英訳されたものである。

ここで訳者の私事に渉ることをお許し願いたい。

わが内なる 〈ジュニヤーナガンジャ〉 ——原田湛玄老師(近代の禅傑・原田祖岳老師法嗣)膝下の若狭・仏国寺における安居生活、和田重正先生(稀代の覚者、『もう一つの人間観』著者)主宰の丹沢・一心寮における日々、他にも幾多の 〈箇箇円成の方々〉 との靈交、その教えは恒にわが胸中に髣髴と現前し、夢に現(うつつ)に今もわが魂を導き給う。私にとっては、これらすべてがかけがえのないわが内なる 〈ジュニヤーナガンジャ〉 である。

人生の大目標は moksha (モクシャ・解脱) の実現、即ち生の根本的不安の解消であり、人生の大事業は dharma (ダルマ・真理) の探求・実践に極まる。では、何処から道に入るのか? 不安、苦惱、悲哀、自然、あらゆる事物が、その種子、機縁となる。《実相観入》(斎藤茂吉)、《negative capability》(Keats) 等、その端緒は問わない。肝要なのは、その課題を心中深く抱き、そと共に留まり、懈怠することなくその道を貫徹することである。

本書を読む限り、〈ジュニヤーナガンジャ〉は、優れて冠絶のヨーギであるスワミ・ヴィシュッダーナンダという一人物に負う処が大きい。大パンディット(学匠)のカヴィラジ師ですら、この偉大な師の蘊奥を究め尽したとは言い難い。更なる研究が求められる所以である。スワミ・ヴィシュッダーナンダに関しては Nand Lal Gupta” YOGIRAJADHIRAJ SWAMI VISHUDDANAND PARAMAHANSADENA Life & Philosophy ” VISHWAVIDYALAYA PRAKASHAN, VARANASI. 2014 が詳しい。関心ある人の参考をお薦めする。

本書に示された道や方法、用語等はヒンドゥイズム固有のものだが、世界の諸宗教、諸スクールの修行体系、理念、目標等との共通点も目につく。その文化や表象には差異があるが、通底する処も多い。必要なのは、言語化以前の体験そのものの新たな言語化と各文化間の融通である。本訳書が、その一助ともなれば、幸甚これに過ぎたるはない。

二〇二二年七月十五日

玉井 辰也